

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2014 年 1 月

「キリストの性質―受肉の期間―（Ⅱ）」「わたしたちの完全な模範、キリストを映して」

「第一天使のメッセージ『聖所の清め』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストの性質―受肉の期間―(Ⅱ)」 4

朝のマナ

「わたしたちの完全な模範、キリストを映して」 9
キリストを映して

現代の真理

「第一天使のメッセージ-聖所の清め」 72
三重のメッセージ

力を得るための食事

「白菜の浅漬け風サラダ」 80

お話コーナー

「よりすぐれた勇気を築く」 82

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>
メール：support@4angels.jp

発行日 2013 年 12 月 31 日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty images on front cover and
on page 9; iStock on back cover

Printed in Japan

救い主の愛の保証

キリストの精神は、伝道の精神である。心が新たにされた人のまず最初の衝動は、他の人をも救い主に導こうとすることである。(各時代の犬争闘上巻 71)

〔ワルド派の人々〕は、万物の終わりが遠い先のことではないことを信じた。そして、祈りと涙をもって聖書を研究したとき、ますますその尊い言葉に深く心を動かされ、その救いの真理を他の人々に伝える義務を感じた。(各時代の犬争闘上巻 74)

ワルド派の人々は、これらの飢えた魂に生命のパンを与え、神の約束のなかにある平和のメッセージを示し、救いの唯一の望みとしてキリストをさし示したいと切望した。……墮落した人類は神の前に、何一つとして自分を推奨しうるものがないために、イエスが人間の犠牲としてなくなれたのである。……人がキリストによりすがり、キリストにつながるということは、手足が体につながり、枝が幹につながるのと同様に、現実で密接なものでなければならない。(同上 75)

嵐になやむ哀れな魂にとって、救い主の愛の保証は、実感できないほど大いなるものに思われた。大きな安心が与えられ、あふれるばかりの光が彼らの上に注がれたので、彼らは天に移されたかのように感じたほどであった。彼らの手は、キリストをしっかりと握り、彼らの足は永遠の岩の上に立っていた。(同上 77)

時には、ただ一人のために、そして時には、光と真理を渴望する小さい群れのために。このようにして徹夜することもよくあった。聴衆があまりにも驚き、感嘆するので、彼らが救いのおとずれを十分に理解するまで、あわれみの使者は朗読を中断せざるをえないこともまれではなかった。(同上)

人々は信仰によって約束をしっかりと捉え、喜びをもって応答した。……きよい喜びが心に満ち、賛美と感謝によってイエスのみ名があがめられるのであった。喜びに満たされたこれらの人々は、真の生ける「道」を発見したという自分たちの新しい経験を、できるだけ十分に他の人々に語り、光を伝えるために、家路を急いだ。(同上 77, 78)

贖罪

キリストの性質―受肉の期間―(Ⅱ)

III. 罪のない人性を取られた

キリストはこの地に、人性をとって、人類の代表として立ち、サタンとの争闘において、神が創造された人間は、御父と御子とつながることによって、すべての神聖なご要求に従うことができることを示すために来られた。(サイモン・オブ・タムズ 1898 年 6 月 9 日)

キリストは第二のアダムと呼ばれている。純潔と聖潔において、神につながり、神に愛されて、このお方は第一のアダムが始めたところから始められた。自発的にこのお方はアダムが倒れた地を通られ、アダムの失敗を贖われた。(ユース・インストラクター 1898 年 6 月 2 日)

時が満ちるに及んで、このお方は人のかたちのうちに現れるのであった。このお方は、人間の罪深さはとらずに、人性をとることによって、人類の頭の地位を占められるのであった。天では次の声が聞かれた、「主は、あがなう者としてシオンにきたり、ヤコブのうちの、とがを離れる者に至る」。(サイモン・オブ・タムズ 1901 年 5 月 29 日)

キリストが頭を垂れて、死なれたとき、このお方はサタンの王国の柱をご自分と共に地に倒された。このお方は、サタンがエデンにおいて勝利を得た同じ性質において、サタンを征服された。敵は、キリストによって、その人性において打ち負かされた。救い主の神格の力は隠されていた。このお方は人性において、力を神により頼んで勝利されたのであった。(ユース・インストラクター 1901 年 4 月 25 日)

ご自身に、墮落した状態における人間の性質を取られることにおいて、キリストはほんのわずかでもその罪にあずかられたことはなかった。このお方は人間が取り囲まれている弱点や弱さを受けられたが、「これは、預言者イザヤによって『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うたと言われた言葉が成就するためである』」。このお方はわたし

たちの弱さを思いやることができないような方ではなく、あらゆる点において、わたしたちと同じように誘惑された。それでいながら、このお方は「罪を知らな」かった。このお方は「きずも、しみもない小羊」であられた。サタンがほんのわずかな細かい点でもキリストを罪へ誘うことができたなら、救い主の頭を砕くことができたのである。しかし、彼はこのお方のかかるとに触れることができたのであった。キリストの頭に触れていたら、人類の望みは滅びたのである。神の怒りは、アダムに下ったように、キリストにも下るのであった。……わたしたちはキリストの人性の完全な罪の無さについて、何の疑念も与えるべきでない。(パイブル・コメント [E. G. ホワイトメント] 5 卷 1131)

気をつけなさい。キリストの人性についてあなたがどのように考えるか、非常に気をつけなさい。人々の前に、このお方を、罪の傾向のある人間として示すことがあってはならない。このお方は第二のアダムであられる。第一のアダムは、純潔で罪なく、その身に罪のしみのない存在として創造された。彼は神のかたちに創造された。彼は墮落することができ、不法を通して墮落した。罪のゆえに彼の子孫は先天的な不従順の傾向をもって生まれた。しかし、イエス・キリストは神のひとり子であられた。このお方はご自身に人性をとられ、あらゆる点において、人間の性質が誘惑されるように誘惑された。このお方は罪を犯すことがおできになった。このお方は墮落することもおできになったが、一瞬たりとも、このお方のうちには悪の傾向がなかった。このお方は、エデンでアダムが誘惑に攻撃されたように、荒野で誘惑に攻撃された。」(同上 1128)

神の御子をご自分を低くされ、人類がエデンから、そしてもとの純潔と高潔さの状態から、四千年間さまよい出た後に、人間の性質を取られた。罪は幾時代にもわたり、人類にその恐るべき傷跡をつけてきた。そして身体的、精神的、道徳的墮落は、人類家族に行き渡っていた。アダムがエデンで誘惑者に攻撃されたとき、彼には罪のしみがなかった。……キリストは誘惑の荒野において、アダムに代わって、アダムが耐えられなかったテストを耐えられた。(レビュー・アンド・ヘラルド 1874 年 7 月 28 日)

誤解されやすいキリストの人性に関して、すべての質問を避けなさい。

真理は憶測の道のすぐわきにある。キリストの人性を取り扱うにあたり、あなたの言葉がそれらの意味する以上に受け取られ、それによってあなたが、神性と結びついたこのお方の人性の明白な理解を失わせたり、曇らせたりすることがないように、あなたはすべての断言を厳として慎む必要がある。このお方の誕生は神の奇跡であった。……決して、いかなる方法においても、ほんのわずかであっても、人の思いにキリストに墮落のしみや傾向があったかのような印象を残してはならない。このお方は人が誘惑されるように、あらゆる点において誘惑されたが、なお「聖なるもの」と呼ばれている。キリストがわたしたちと同じようにあらゆる点において誘惑されながら、なお罪のないお方であられたというのは、死すべき人間に説明されずに残されている神秘である。キリストの受肉はこれまでも、これからも神秘であり続ける。表されたことは、わたしたちとその子供たちのものであるが、すべての人はキリストをまったくわたしたちと同じような人間にしてしまう見地から離れているようにとの警告を受けなさい。なぜなら、それはあり得ないからである。(パイプ・コメント[E. G. ホワイト] 5巻 1128, 1129)

キリストご自身のうちに、なんと反対のものが出会い、現わされていることであろう! 力ある神でありながら、無力なみどり子であるとは! 全世界の創造主でありながら、ご自分の創造された世界のうちにあって、しばしば飢えられ、弱り、その頭の枕するところもないとは! 人の子でありながら、御使いたちより無限に高いとは! 御父と等しくありながら、人類が有利な地点に立つことができるように、このお方の神性が人性で覆われ、墮落した人類の頭として立たれたとは! 永遠の富を持ちながら、なお貧しい人の生涯を送られたとは! 威光と力において御父と一つであるお方でありながら、人性においてわたしたちと同じようにあらゆる点において誘惑を受けられたとは! このお方は十字架上で死にゆく苦悩のその瞬間、このお方は、あなたの御国に入られるときに覚えていてくださいとの悔い改めた罪人の要求に答える勝利者であられた。(サインズ・オブ・タイムズ 1905年4月26日)

IV. 人間の性質の傾向を引き受けられた

人の肉のうちにあるキリストの受肉の教義は、神秘であり、「世々隠されていた奥義」である。それは偉大にして深遠な神格の神秘である。……

キリストは人性をとったことを信じさせられたのではなかった。このお方はまさにそれを取られたのである。このお方は現実的に人性を持っておられた。「子たちは血と肉と共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる」。このお方はマリヤの子であられた。このお方は人間の家系で言えばダビデの子孫であられた。(ビュー・アンド・ヘラルド 1906 年 4 月 5 日)

このお方は人のかたちのうちに来られ、人のうちで人の生涯を送られた。このお方は試され、試練を受けるために、人性の傾向をご自分の身に受けられた。ご自分の人性において、このお方は神性にあずかる者であられた。ご自分の受肉によって、このお方は新しい意味において、神の御子の肩書を得られた。(サイン・オブ・タイムズ 1905 年 8 月 2 日)

だが救い主は、罪の負債ごと人性をおとりになった。彼は試みに負ける可能性のまま人間の性質をおとりになった。キリストが耐えられなかったことで、われわれの耐えねばならないことは何一つない。(各時代の希望 上巻 125)

キリストはご自分が人類を助けるために地に来られたときに存在していた人類の罪と弱さを負われた。人類のために、墮落した人類の弱さを身に受けて、このお方は人が攻撃されるあらゆる点において、サタンの誘惑に耐えられるのであった。(ビュー・アンド・ヘラルド 1874 年 7 月 28 日)

イエスは、あらゆる点において、兄弟たちと同じようになられた。イエスは、われわれと同じように、肉体をおとりになった。彼は飢え、渇き、お疲れになった。主は、食物によって力づけられ、睡眠によって元気を回復された。イエスは、人と同じ身分でありながら、しかもきずのない神のみ子であられた。イエスは、肉体をとられた神であられた。キリストのご品性がわれわれのものとなるのである。(各時代の希望 中巻 20)

キリストの人性はわたしたちのそれと同様であり、苦悩はこのお方がさらに鋭く感じられた。なぜなら、このお方の霊性には、罪のしみがー

切なかったからである。そのために、苦悩が取り除かれるようにというこのお方の願いは、人間が経験できる以上に強かった。……

神の御子は罪に対する神の怒りを耐えられた。あらゆる蓄積された世の罪が罪を負われるお方、罪のないお方、ただ一人罪のための贖いの供え物となることがおできになるお方の上におかれた。なぜなら、このお方ご自身は従順であられたからである。このお方は神と一つであられた。墮落のしみは一つとしてこのお方の上になかった。(サインズ・オブ・タイムズ 1897 年 12 月 9 日)

イエスは、われわれと一つになって、われわれの不義と苦悩の重荷を負われねばならない。罪のないおかたが罪の屈辱を感じられねばならない。……律法を犯したために生じたあらゆる罪、あらゆる不和、あらゆるけがれた欲がイエスの心を苦しめた。(各時代の希望上巻 116)

世の罪の重さがこのお方の魂を圧迫していた。そしてこのお方のみ顔は言い表しようのない悲しみと墮落した人類は決して悟ることのできない苦悩の深さを表していた。このお方は世を洪水のように襲った苦悩の圧倒的な潮を感じておられた。このお方はほしいままにされてきた食欲と汚れた情欲が世を支配している力を実感された。(レビュー・アンド・ヘラルド 1874 年 8 月 4 日)

贖罪において完全な正義がなされた。罪人の代わりに、しみのない神の御子が刑罰を受けられた。そして罪人はキリストを自分の個人的な救い主として受け入れ、つかんでいる限り、自由なのである。有罪でありながら、無罪の者として見なされる。キリストは正義が要求するすべての要求を果たされた。(ユース・インストラクター 1901 年 4 月 25 日)

罪のないお方でありながら、罪人の刑罰を負われた。罪のないお方が、律法の違反者の身代わりとしてご自身を捧げられた。すべての罪の罪深さはその重さをもって世の贖い主の神聖な魂にのしかかっていた。(サインズ・オブ・タイムズ 1892 年 12 月 5 日)

このお方はご自分の罪のないご性質にわたしたちの罪深い性質を取られた。それはこのお方が誘惑された人々をどのように助けるかを知ることができるためであった。(医事伝道 181)

キリストを映して

Reflecting CHRIST



1月 「わたしたちの完全な模範、キリストを映して」

1月1日

キリスト—御父と一つ

「『おとめが……男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう』。これは、『神われらと共にいます』という意味である』。」(マタイ 1:23)

「神の栄光を知る知識」は「イエス・キリストの顔」にみられる。永遠の昔から、主イエス・キリストは天父と一つであられた。キリストは、「神のみかたち」、神の偉大さと尊厳のみかたち、「神の栄光のかがやき」であられた。キリストがこの世にこられたのは、この栄光をあらわすためであった。神の愛の光をあらわすために、すなわち「われらと共にいます」神となるために、キリストは、罪のために暗くなったこの地上においてになった。だから、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」とイエスについて預言された。

イエスは、われわれのうちに住むためにおいでになることによって、人類にも天使にも神を示されるのであった。イエスは神のみことば—きこえるようにされた神の思想であった。キリストは、弟子たちのための祈りの中に、「わたしは彼らに」—「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみとまこととの豊かなる」あなたの「み名を知らせました。」—「あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにおるためであります」と言っておられる。……

だがこの啓示は、この地上に生れた子らにだけ与えられたのではなかった。われわれの小さな世界は、宇宙の教科書である。神のすばらしい恵みの目的、すなわちあがないの愛の奥義は、「御使いたちも、うかがい見たいと願っている」テーマであって、それは永遠にわたって彼らの研究となるであろう。あがなわれた者も、墮落しなかった者も、キリストの十

字架に彼らの科学と彼らの歌をみいだすであろう。イエスのみ顔にかがやいている栄光は自己犠牲の愛の栄光であることがわかるであろう。カルバリーの光に照してみても、おのれを捨てる愛の法則が天と地の生命の法則であること、「自分の利益を求め」ない愛はそのみなもとが神の心にあること、柔和で心のへりくだったおかたのうちに、だれも近づくことのできない光のうちに住んでおられる神のご品性があらわれていることなどがわかるであろう。……

われわれは、イエスのうちに神を見るのである。イエスを見るとき、われわれは、与えることがわれらの神の栄光であることがわかる。「わたしは自分からは何もせず」、「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きている」。「わたしは自分の栄光を求めてはいない」。「自分をつかわされた方の栄光を求める」とキリストは言われた（ヨハネ 8:28、6:57、8:50、7:18）。これらのことばの中に、宇宙の生命の法則である大原則が示されている。すべてのものをキリストは神からお受けになったが、彼は与えるためにお受けになったのである。天の宮廷ですべての被造物のために奉仕しておられるときもそうである。愛するみ子を通して、天父の生命はすべてのものに向かって流れ出る。み子を通して、それは賛美とよろこびの奉仕のうちに、愛の潮流となって、すべてのものの根源である神へもどって行く。このようにキリストを通して愛の循環が完成され、それは偉大な賦与者であられる神のご品性—生命の法則を象徴している。（各時代の希望上巻1～4）

1月2日

神から遣わされた教師

「しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を……おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。」（ガラテヤ 4:4, 5）

キリストの初臨の時に、闇が地を覆っており、完全な闇が人々を覆っていた。真理は天から見下ろして、どこにも自分のかたちの反映を認めることができなかった。霊的な闇が宗教界をすっぽりと覆い、この闇はほとんど全世界的かつ全面的であった。……

万物は地上における神から遣わされた教師—神性と人性の結合した教師—の緊急な必要性を宣言していた。墮落した人類を引き上げるためには、キリストが人間のかたちで現われ、人類の頭として立たれることが不可欠であった。こうしてはじめて神が世に表わされることができた。

キリストは自らすすんでご自分の王衣と王冠をわきへおき、人類が神と協力することによってどのようなことができるかを彼らに示すためにこの地上へ来られた。このお方は闇のただ中で輝き、ご自分のご臨在の明るさによって、闇を消散するために来られた。……

御父と御子は、協議の上、キリストがこの世に赤ん坊として来られ、子供から成人まで人類が送らなければならない生涯を送ること、すなわち、彼らが耐えなければならない試練に耐え、なおかつ罪のない生涯を送ることによって、人がどのようになれるかという模範をキリストのうちに見、またこのお方が経験によって罪と苦闘する人類をどのように助けるかを知ることができるようになることが決まった。このお方は人が試練を受けるように試練を受け、人が誘惑されるように誘惑された。このお方がこの世で送ら

れた生涯は、このお方の力を通して、このお方の教えの下に、人が送ることのできる生涯である。……

父祖と預言者たちは、際立った教師、すなわちその言葉が無敵の力と権威をまとっているお方の来臨をあらかじめ述べていた。このお方は貧しい者に福音を宣べ伝え、主の恵みの年を告げるのであった。このお方は道を地に確立し、海沿いの国々はその律法を待ち望み、もろもろの国は、このお方の光に來、もろもろの王は、のぼるこのお方の輝きに來るのであった。このお方は「契約の使者」であり、「義の太陽」であられた。……

そして「時の満ちるに及んで、神は御子を……おつかわしになった」。……天來の教師は來られた。このお方はどなたであろうか。神の御子ご自身に他ならない。この方は神として、また同時に人類の長兄として現われた。(サインズ・オブ・タイムズ 1905 年 5 月 17 日)

イエスは、ご自分が人に教えた通りに自ら生活された。……イエスの教えはイエスの人格であったということである。イエスのみ言葉は、イエスご自身の人生の経験の表現であつたばかりでなく、イエスご自身の品性の表現であつた。イエスは真理を教えられたばかりでなく、イエスご自身が真理そのものであつた。イエスの教えに力をあたえたものはこれであつた。(教育 78)

1月3日

キリストはわたしたちのために ご自身を犠牲にされた

「御使たちよりも低い者とされたイエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。」（ヘブル 2:9）

主は人間を純潔で聖なる者に創造された。しかし、サタンは彼を背教へ導き、彼の原則をゆがめ、彼の思いを墮落させ、彼の思想を悪い水路へ転じた。彼の目的は世を完全に墮落させることであった。

キリストは人の恐るべき危険をごらんになり、ご自身の犠牲によって人を救う決心をなさった。このお方は墮落した人類のための愛のご目的を成し遂げることができるために、わたしたちの骨の骨となり、肉の肉となられた。「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。……そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。」……

聖霊の働きを通して知的また霊的な力の新しい原則が、人にもたらされなければならない。すなわち、人は、神性との交わりによって神と一つにならなければならない。贖い主であり回復者であるキリストが、人の思いを聖化し、純潔にして、その思いを、他の人々の思いをご自分に引き寄せる力とするのであった。高め、聖化する真理の力によって、人に高潔さと

威厳を与えることがこのお方のご目的である。このお方はご自分の子らがご自分の品性を表し、ご自分の感化力を及ぼして、他の人々の思いをご自分の思いとの調和へ引き寄せることを願っておられる。……

キリストはわたしたちの罪のゆえにわたしたちから遠く離れることもおできであったが、遠く離れる代わりに、このお方はわたしたちと一つになるために、満ちみちているいっさいの神の徳に満たされて来て下さり、わたしたちの間に住まわれた。それはご自分の恵みによってわたしたちが完全に到達できるためであった。このお方は恥と苦しみの死によって、わたしたちのあがない代を払って下さった。このお方は、ご自分の神性に人性をまとい、最高の卓越さからへりくだりの最も低いところまで一步一步下って来られた。このお方の愛の深さを測ることのできる測りひはない。……

クリスチャンであると公言する者が神の資源をつかまないこと、また彼らがもつとはっきり十字架を許しと赦免の手段として、すなわち誇り高い利己的な人の心が聖霊に直接触れるようにする手段として見ないことに驚いている。これらによって、キリストの富が思いの中に注ぎ込まれ、人間が御霊の恵みで装われ、またキリストを知らない者にキリストが推奨されるのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1902 年 9 月 24 日)

1月4日

キリストはわたしたちに 生ける水を供給なさる

「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。』」
(ヨハネ 7:37, 38)

祭司は、荒野で岩を打ったことを記念する行事をとりおこなった。その岩は、ご自分の死によって、かわいているすべての者に向かって救いの生ける水を流れさせてくださるキリストの象徴であった。キリストのみことばは生命の水であった。集まった群衆の目の前で、キリストは、生命の水が世に流れ出るように打たれるためにご自分を聖別された。サタンは、キリストを打つことによって、いのちの君を滅ぼそうと思ったが、打たれた岩からは生ける水が流れ出た。イエスがこのように人々に語られたとき、彼らの心はふしぎなおそれにうちふるえ、多くの者は、サマリヤの女のように、いまにも「わたしがかわくことがな……いように、その水をわたしに下さい」と叫びそうになった(ヨハネ 4:15)。

イエスは魂の欲求を知っておられた。はなやかさや富や名声は心を満足させることができない。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」。金持も貧しい者も、身分の高い者も低い者もみな一様に歓迎される。イエスは、重荷を負った心を助け、悲しむ者を慰め、落胆した者に望みを与えると約束しておられる。イエスのみことばを聞いた者の中には、望みを失って嘆いている者や、ひそかな悲しみを心にいだいている者や、やむことのない心のあこがれを世俗の事物と人々の称賛によって満たそうとしている者が多かった。だが彼らは、これらのものをすべて手に入

れたとき、自分のほねおりによって到達したものはかわきをいやすことのできないこわれた水槽にすぎないことを知った。はなやかな歓喜の光景のさなかに、彼らは不満と悲しみのうちに立っていた。「だれでもかわく者は」というその突然の叫びが、彼らを悲しい思いから呼びさました。そしてそれにつづくことばを聞いたとき、彼らの心には新しい望みの火がともった。聖霊は彼らの前に象徴を示されたが、ついに彼らはその中に無限の価をもった救いの賜物が提供されているのに気がついた。

かわいた魂に対するキリストの叫びはいまもお出されており、それはあの祭の最後の日に宮で聞いた人々に対するよりももっと強い力でわれわれに訴えている。泉はすべての人のために開かれている。疲れ果てた人々に、清新な力を与える永遠の生命の水が提供されている。イエスはいつもこう叫んでおられる。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」。「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録 22:17)。「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」(ヨハネ 4:14)。(各時代の希望中巻 234, 235)

1月5日

キリストの憐れみは限りがない

「これは、預言者イザヤによって『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』と言われた言葉が成就するためである。」(マタイ 8:17)

わたしたちの主イエス・キリストは人類の必要に応じられるために倦むことのないしもべとしてこの世においでになった。彼は人類のすべての必要に奉仕なさるために、「わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負」われた。すなわち、病気の重荷とあわれな状態と罪を除くために、キリストはこられたのである。人類を完全に回復することが彼の使命であった。彼は、健康と平安と完全な品性を与えるためにおいでになったのである。

彼に助けを求めてきた人々の境遇や要求は種々さまざまだったが、助けを受けなくて帰った者はひとりもなかった。人々は、キリストから流れ出るいやしの力のおかげで、からだも頭も心も健康にもらった。

救い主の働きは時間や場所に制限されなかった。彼のあわれみは無限であった。そのいやしと教えのわざはあまりに大きかったので、集まって来る群衆を収容できるほどの大きな建物はパレスチナになかった。ガリラヤの緑の丘、人の行きかう大路、あるいは海辺、あるいは会堂、その他どんなところでも病人のつれてこられる場所が、彼の病院となった。彼は自分の通るすべての町々村々で病人に手を置いておやすしになった。そして、彼の言葉を喜んで受け入れる人々があると、いつも天父の愛の確証をもって、彼らを慰められた。一日中彼は、ご自分のもとに来る人々に奉仕し、夕には、昼間労働して家族をささえる、わずかの糧を得なければならない人々のためにつくされた。

イエスは人類救済という大きな重荷を負っておられた。人類の主義や目的に決定的な変化がなければ、すべてのものが滅びてしまうことを知っておられた。これが彼の心の重荷だったが、彼の上に負わされたこの重荷を理解できる者はだれもなかった。またキリストは、子供のときも、青年時代も、そして成人してからもひとりの生活を送られた。……

キリストは、試練、誘惑にも日々遭遇なされ、悪と接触なさるたびに、自分が祝し救ってやりたいと願っておられた人々の上に、悪の力が働いているのをごらんになった。しかし決して、負けたり失望したりなさらなかった。……

彼はいつも忍耐強く、快活であられたから、病める人々は、彼を生命と平安の使者と称賛した。彼は男や女や、子供や青年の必要をごらんになって、「わたしのもとにきなさい」とお招きになった。……

町や都市を通り過ぎていかれるとき、さながら彼は、生命と喜びをまきちらす生きた流れのようであつた。(福音宣伝者 41 ～ 43)

1月6日

主のかたちに変えられる

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」(コリント第二 3:18)

罪の重荷を負った苦闘している魂、わたしたちのために仲保の働きをするため、イエスは栄化された人間の姿で天に上られた。「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは……はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」。わたしたちは絶えずわたしたちの信仰の創始者であり、完成者であるイエスを見上げていなければならない。なぜなら、わたしたちはこのお方を眺めることによってこのお方のかたちに変えられ、わたしたちの品性がこのお方の品性のようにされるからである。わたしたちは裁きがすべて御子に委ねられていることを喜ぶべきである。なぜなら、このお方はご自分の人性にあて、人性にからみつく困難をすべてお知りになったからである。

聖化されるとは、イエスの霊と意思をとらえ、絶えずキリストの学校で学びながら、神性にあずかる者になることである。「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」。わたしたち自身の力で、あるいはわたしたち自身の努力で、この変化を自分のうちに起こすことは不可能である。わたしたちの品性をキリストの姿に変えるのは、イエスが世につかわすと仰せになった聖霊、すなわち慰め主であられる。そしてこれが成就するとき、わたしたちは主の栄光を鏡に映すよう

に反映するようになる。つまり、このようにキリストを眺める者の品性が非常にこのお方のご品性に似ているため、彼を見る者はキリストご自身のご品性があたかも鏡から輝き出ているかのように見える。わたしたちは自分では気づかないが、日毎に自分自身の方法と意志からキリストの方法と意志へ、すなわちこのお方の麗しさへと変えられる。このようにわたしたちはキリストのうちに成長し、無意識のうちにこのお方の姿を反映する。

クリスチャンであると公言する者が、あまりにも地の低地に近すぎる。彼らの目はごく通俗的なことだけを見るように訓練されており、彼らの思いは自分の目が眺める事柄を考え続けている。彼らの宗教経験はしばしば浅くて満たされず、彼らの言葉は軽々しく価値がない。そのような者がどのようにしてキリストの姿を映すことができるであろうか。地の暗いすべての場所に義の太陽の輝かしい光線を送り出すことができるであろうか。クリスチャンであるということはキリストのようであるということである。……

〔エノク〕は絶えずイエスの感化の下にいた。彼はキリストの品性をたえず反映し、善意、憐れみ、優しい思いやり、同情、寛容、柔和、へりくだり、そして愛において同じ特質を表わしていた。キリストとの日毎の交わりは、彼が非常に親密に交わっていたお方の姿へと彼を変えた。(レビュー・アンド・ヘルド 1912 年 12 月 5 日)

1月7日

キリストは魂に 神への信頼をいだかせる

「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。」（ヨハネ第一 5:4）

どのような種類の信仰が世に勝つのであろうか。それはキリストをあなたの個人的な救い主とする信仰—自分の無力さ、自分自身を救うことのできないまったくの無能さを自覚し、あなたの唯一の希望として、救うのに力強い助け主をつかむ信仰である。それは失望せずに、キリストのみ声が、「しっかりしなさい、わたしはすでに世に勝っている。そしてわたしの神聖な力はあなたのものである」と言われるのを聞く信仰である。それは、このお方が「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と言われるのを聞く信仰である。

教会が弱く活気がなく死にかけている理由は、敵が震えている魂を圧迫するために、失望させるような性質の感化力をもたらしているからである。彼は彼らの視界から、慰め主として、すなわち戒め、警告し、彼らに「これが道だこれに歩め」と仰せになって彼らに訓告してくださるお方としてのイエスを締め出そうと努めてきた。キリストは天においても地においてもいつさいの権威を持っておられ、このお方は揺れ動く者を強め、誤っている者を正すことがおできになる。このお方は神への信頼と希望をいだかせることがおできになる。そして神への信頼はいつも結果としてお互いへの信頼を引き起こすのである。

すべての魂は、キリストが自分の個人的な救い主であるという自覚を持たなければならない。そのとき愛、熱意、堅固さが、クリスチャン生活の中に表わされるようになる。真理がどれほど明白で確信させるものであつ

でも、それがたえず生活に接触していない限り、魂を聖化させることも、魂の戦いの中でそれを強め、堅固にすることも防備を固めることもできない。サタンは魂と救い主の間に自らを割り込ませることによって、最も大きな成功を収めてきた。

キリストを決して思いの外に出してはならない。天使たちはこのお方に關して「その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」と言った。イエス、尊い救い主！保証、助け、安全、平和がすべてこのお方のうちにある。このお方はわたしたちのすべての疑いを一掃し、わたしたちのすべての希望を保証なさるお方である。わたしたちが本当に神性にあずかる者になることができ、それによってわたしたちもキリストが勝利されたように勝利することができるとは、なんと尊い思想であろうか。イエスはわたしたちの期待の満ち満ちたお方である。このお方はわたしたちの讃美の旋律、疲れた地にある大きな岩の陰であられる。この方は渇いた魂にとって生ける水であられる。嵐の中のわたしたちの避けどころであられる。このお方はわたしたちの義、わたしたちの聖化、わたしたちの贖いであられる。キリストがわたしたちの個人的な救い主であられるとき、わたしたちは暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたへの讃美を表わすのである。……

キリストは律法が犯されたので死なれたが、それは罪を犯した人間がその極悪な罪の刑罰から救われることができるためであった。しかし歴史は世を滅ぼすほうがそれを回復するよりも容易であることを証明している。なぜなら人間は栄光の主を、すなわち地を天と結びつけ、人を神と結びつけるために来られたお方を十字架につけたからである。(レ・ビュー・アンド・ヘラルド 1890 年 8 月 26 日)

1月8日

信仰の目によって キリストは絶えず臨在しておられる

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。」(ヨハネ 16:7)

キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ」と言われた。そのとき、キリストとの個人的接触や居場所のゆえに、だれかがなんらかの優先権を持つことはできない。すべての人はひとしく、救い主に、霊的に、近づくことができるようになるのであった。そしてこの意味においてこのお方は、天に上られなかったよりもわたしたちに近くなられるのである。今すべての者はこのお方を眺め、そのご品性を反映することによって、ひとしく恩寵を受けることができるのである。信仰の目は絶えずこのお方が臨在しておられること、すなわち、ことごとくこのお方の善意、恵み、寛容、礼儀、愛、それらの霊的な神の属性のうちにこのお方がおられるのを見るのである。そしてわたしたちが眺めるとき、わたしたちはこのお方のように変えられる。

キリストはまもなく天の雲にのって来られるので、わたしたちはしみもしわもその類のものが一切ないように、このお方に会う準備をしなければならぬ。今、わたしたちはキリストの招待を受けるべきである。このお方は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」と仰せになる。ニコデモへのキリ

ストのみ言葉は今日のわたしたちにとって実質的な価値がある。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」。

神の改心させる力がわたしたちの心に働かなければならない。わたしたちはキリストの生涯を研究し、神聖な型であるお方を模倣しなければならない。このお方の品性の完全さを熟考し、その姿に変えられなければならない。だれも自分の意志がキリストの意志にとりこにされないかぎり、神の国に入ること天国には罪も汚れも不純もいっさいない。だから、もしわたしたちがその雰囲気の中に住み、キリストの栄光を眺めたいのであれば、わたしたちはこのお方の恵みと義を通して、心が清くなり、品性において完全にならなければならない。わたしたちは快樂と娯楽に夢中になるのではなく、キリストがわたしたちのために用意しに行かれた栄光に満ちた住まいにふさわしくならなければならない。もしわたしたちが忠実であり、他の人々を祝福しようと努め、忍耐強く善を行うなら、キリストはご自分が来られるときに、わたしたちに栄光、榮譽、不死を冠してくださる。(ビュー・アンド・ヘアルド 1912 年 12 月 5 日)

1月9日

キリストは罪によって生じた深淵に 橋をかけて下さった

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16)

罪は利己心から起った。蔽(おお)うことをなす天使ルシファーが天の第一位を望んだ。彼は天使たちを支配し、彼らを創造主からひき離して、自分に忠誠を誓わせようと試みた。そこで彼は神について悪宣伝し、神にはいばりたいという野心があるのだと言った。彼は自分自身の邪悪な特徴を愛の神におしつけようとした。こうして彼は、天使たちをあざむいた。こうして彼は人類をだました。サタンは彼らに神のみことばを疑わせ、神の恵みを信じさせないようにした。神は正義と恐るべき威光の神であられるので、サタンは、神がゆるすことのないきびしい神であると彼らに考えさせた。こうして彼は人々をひっぱって神への反逆に加わらせ、わざわいの夜がこの世にやってきた。

神を曲解したために、この地上は暗くなった。暗黒の影を照し、世の人々を神に呼びもどすためには、サタンの欺瞞(ぎまん)的な力をうち破らねばならなかった。このことは、暴力によってなすことはできないのであった。暴力の行使は神の統治の原則に反する。神は愛の奉仕だけを望まれる。愛を命令することはできない。暴力や権威によって愛を手に入れることはできない。愛は愛によってのみめざめさせられる。神を知れば神を愛するようになる。神のご品性がサタンの品性と対照的に示されねばならない。この働きは全宇宙でただひとりのおかただけができた。神の愛の高さと深さを知っておられるおかただけが、その愛を知らせることがおで

きになった。世の暗い夜に、義の太陽キリストが「翼には、いやす力をそなえて」昇られねばならない(マラキ書 4:2)。

われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった。それは、「長き世々にわたって、かくされていた奥義」のあらわれであった(ローマ 16:25)。それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった。初めから、神とキリストは、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞的な力によって人類が墮落することを知っておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に応ずる備えをされたのであった。……

イエスがわれわれとともに住むためにおいでになったので、われわれは、神がわれわれの試練をよく知り、われわれの悲しみに同情してくださるということがわかる。アダムのむすこ娘はみな創造主が罪人の友であることをさとることができる。なぜなら、救い主の地上生活にあらわされた恵みの教理の一つ一つに、よろこびの約束の一つ一つに、愛の行為の一つ一つに、きよい美しさの一つ一つに、われわれは「神われらとともにいます」ことを知るのである。(各時代の希望上巻 4～7)

1月10日

神の姿が輝き出る

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ 5:48)

クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において完全であられたように、キリストに従う者も、その生活において完全でなければならない。イエスは、あらゆる点において、兄弟たちと同じようになられた。イエスは、われわれと同じように、肉体をおとりになった。彼は飢え、渇き、お疲れになった。主は、食物によって力づけられ、睡眠によって元気を回復された。イエスは、人と同じ身分でありながら、しかもきずのない神のみ子であられた。イエスは、肉体をとられた神であられた。キリストのご品性がわれわれのものとなるのである。……

キリストはヤコブの見たはしご、すなわち足が地面について、てっぺんが天の門、栄光の門口に達しているはしごである。もしこのはしごがたった一段でも地についていなかったら、われわれは滅びてしまったのである。だがキリストは、われわれがいまいるところで、われわれにとどいてくださる。主は、われわれの性質をおとりになって勝利されたが、それは、われわれがキリストの性質をとることによって勝利するためである。イエスになって勝利されたが、それは、われわれがキリストの性質をとることによって勝利するためである。イエスは「罪の肉の様」になられたが、罪のない生涯をおくられた(ローマ 8:3)。いまキリストは、神性によって天のみ座につらなっておられるが、一方では人性によってわれわれのもとに達しておられる。キリストは、わたしを信ずることによって、神のご品性の栄光に到達しなさいとわれわれに命じられる。だからわれわれは、「天の父が

完全であられるように」完全な者となるのである。

イエスは、すでに、義が何にあるかを示し、神を義の根源としてさし示された。いま主は、实际的な義務に目を向けられた。施しにおいても、祈りにおいても、断食においても、人の注意をひくためや、自分がほめられるために何事もしてはならないと、主は言われた。困っている貧しい者のために、まごころから施しなさい。祈りにおいて、魂を神とまじわせなさい。断食においては、頭をたれ、自我の思いでいっぱいになった心でこれを行ってはならない。……神に最もよろこばれる奉仕をする者は、自分を余すところなく神に従わせる者である。なぜなら、神とのまじわりによって、人は、神と共なる働き人となり、人類に神のご品性を示すことができるからである。

誠実な心からなされる奉仕には、大きな報いがある。「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」。キリストの恵みによって生きる生活を通して、品性が形成される。魂には本来の美しさが回復しはじめる。キリストの品性の特徴がわけ与えられ、神のみかたちが光を放ち始める。神と共に歩み、働く男女の顔には、天の平安があらわれる。彼らは天の雰囲気がかこまれる。このような魂には、神のみ国がはじまったのである。彼らには、キリストのよろこび、すなわち人類の祝福となっているというよろこびがある。彼らには、主のご用に受け入れられるという光栄がある。彼らは、主のみ名によって、主の働きをするように信任されている。(各時代の希望中巻 20 ～ 22)

1月11日

キリストは霊的および身体的な 癒しをもたらされた

「わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし」（詩篇 103:2, 3）

キリストは中風患者に「人の子は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたがたにわかるために」起きて歩めとお命じになった。

この中風患者は、キリストのうちに魂と肉体のいやしをみいだした。霊的ないやしに肉体的な回復がつづいた。この教訓をみのがしてはならない。今日肉体の病気にかかりながら、この中風患者のように、「あなたの罪はゆるされた」とのことばをきくのを待ち望んでいる者が幾千人となくいる。とどまるところを知らず、満たされることのない欲望をもった罪の重荷こそ、彼らの病気の根源である。彼らは魂をいやしてくださるおかたのもとに行くまでは安心が得られない。イエスだけがお与えになることのできる平安によって、心に活力が与えられ、肉体に健康が与えられる。

イエスは「悪魔のわざを滅ぼしてしまうため」においてになった。「この言に命があった」。イエスは「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われる。イエスは「命を与える霊」である。イエスは、この地上において病人をいやし、罪人にゆるしをお告げになったときと同じに、いまもなおいのちを与える力を持っておられる。主は「あなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいや」される（詩篇 103:3）。

中風患者のいやしが人々に与えた効果は、ちょうど天が開いて天国の栄光があらわされたようなものだった。病気をいやされたこの男が一步ごと

に神を賛美し、荷物を羽毛のように軽々とかついで群衆の間を歩いて行くと、人々はうしろへさがって道をあけ、畏敬の念にうたれた顔つきで彼をじっとみつめ、「きょうは驚くべきことを見た」とそっとささやき合った。……

中風をいやされた男の家では、……大きなよろこびがあった。……彼は元気に満ちた一人前の男として彼らの前に立った。以前にはいのちがかよっているようには見えなかった彼の両腕が、すぐに彼の意志に従った。ちぢかんで鉛色をしていた彼の肉体が、いまは若々しく赤味をおびていた。彼はしっかりした足どりで自由に歩いた。彼の顔つきの一つ一つにはよろこびと望みが書かれ、罪と苦難のしるしに代って純潔と平和の表情が見られた。よろこびと感謝のことばがその家からのぼって行き、神は、望みのない者に望みを回復し、傷ついた者に力をお与えになったみ子を通して栄光を受けられた。この男とその家族は、イエスのためならいつでもいのちをささげようと思った。彼らの信仰をくもらせる疑いはなく、彼らの暗い家庭に光をお与えになったイエスへの忠誠心をさまたげる不信はなかった。(各時代の希望上巻 341～343)

1月12日

キリストのみ言葉には 人を動かさずにおかない力があつた

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1:29)

「イエスがガリラヤの海べを歩いておられると、ふたりの兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ……をごらんになった。……イエスは彼らに言われた、『わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』。すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。……」

報酬の約束もない、これらの男たちの迅速にして疑問をいだかない従順は、注目に値すべきことに思える。しかし、キリストのみ言葉は人を動かさずにおかない力がある招きであつた。キリストはこれらのいやしい漁師たちを、ご自分との接触の中で、人々をサタンの奉仕から取り出して神の奉仕のうちへおく手段となさるのであつた。この働きにおいて、彼らはこのお方の証人となり、世に対して人の伝統や詭弁の混じらない真理を担うのであつた。このお方の徳を実践し、このお方と歩み、働くことによって、彼らは人間を獲る漁師にふさわしい者とされるのであつた。……

三年の間、彼らは救い主との接触の中で労した。そして、このお方の教えによって、このお方の癒しの働きによって、このお方の模範によって、彼らはこのお方が始められた働きを勧める準備をした。信仰の単純さによって、純粋でつつましい奉仕によって、弟子たちは神のみ事業における責任を果たすことを教えられた。

使徒たちの経験から、わたしたちの学ぶべき教訓がある。これらの人々は原則に対しては鋼鉄のように真実であつた。彼らは弱ることも失望することなかった。彼らは神への敬神と熱心に満ち、気高い目的と大志に満たされていた。彼らは生来、今働きに携わっている人々のだれとも同じよ

うに弱く、無力であつたが、自分たちの全信頼を主においた。彼らには富があつたが、それは思いと魂の教養からなっていた。そしてこれは、神を万事につけ最初で最後で最善とするすべての人が持つことのできるものである。彼らは長い間、キリストの学校で自分たちに与えられた教訓を学ぶのに苦勞したが、徒勞に終わることはなかった。彼らは自らをあらゆる力の中で最強のものに結びつけ、いつもより深く、より高く、より広い永遠の現実の理解を切望していた。それは彼らが真理の宝を、必要としている世にうまく提示できるためであつた。……

どこでも、心が目覚め、改心させられるために、真理の光が輝き出なければならない。すべての国々で福音が宣布されなければならない。神の僕たちは遠近の場所で、ぶどう畑の栽培地の面積を拡大しながら、遠隔地にまで出て、労しなければならない。彼らは昼の間に働かなければならない。なぜなら、夜が来るからである。するとだれも働けなくなる。(福音宣伝者 24～26)

1月13日

キリストは人間の尊厳を認められた

「ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったのである。キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、」（エペソ 2:13, 14）

キリストは、国や階級や信条の相違をお認めにならなかった。学者やパリサイ人は、天の賜物を一国民に限られた特権とし、世界の各地にいる神の他の家族を除外しようとした。しかしキリストは、いつさいの隔ての壁をこわすためにおいでになった。彼は、神の憐みと愛の賜物が、空気や光や、また地を爽快にする雨のように、制限されていないことを示すためにおいでになったのである。

キリストの生涯によって、階級に差別のない宗教が確立された。それはユダヤ人も異邦人も自主も奴隷も、同じ兄弟として結びつけ、神の前に平等にする宗教であった。どんな社会政策も、彼の運動に影響を及ぼすことはできなかった。彼は隣人も旅人も、友も敵も区別がなかった。彼の心をひきつけるものは、生命の水にうえかわく魂であった。

彼は、どんな人間も無価値な者として見過ごしにすることなく、すべての人をいやそうとなさった。そしてどんな人々の間にあっても、その時の事情に適切な教訓をお与えになった。人間同志が示すあらゆる冷淡さや侮辱は、ただ彼に、神および人としてのキリストの同情を彼らが要していることを感じさせるだけであった。彼は最も粗野な絶望的な人々にも、彼らがきずなくけがれなき者となり、神の子らしい品性に到達しようとの確証を与えて、望みをおこさせようと努力なされた。

彼は、しばしばサタンに自由になされて墮落し、そのわなからぬけ出る力

のない人々にお会いになった。このように失望し、病気にかかり、あるいは誘惑され、墮落した人たちに、キリストは、非常にやさしいあわれみの言葉をおかけになったが、それは彼らが最も必要としましたよく理解できる言葉であった。彼はまた魂の敵と一騎打ちをしている人々にもお会いになったが、これらの人々には神の使者たちが味方となり、勝利させてもらえるから確かに勝てると保証なされて、忍耐するように励まされた。

その同情と親切なまじわりは、彼が人間の真価を認めておられることを示したので、彼は取税人の食卓に名誉の客としてお招かれになった。そして人々は自分たちも信頼に足る者になりたいと思った。これらのかわいた心に、キリストのみ言葉は、祝福と生命力を与えた。そこには新たな感情が呼びさまされ、社会から捨てられたこれらの人々に、新たな生命に入ることのできる道が開かれた。

彼はユダヤ人だったが、サマリア人と自由にまじわり、ユダヤ国のパリサイ的な習慣を無視なされた。……そして人間的な同情のきずなで、彼らの心をご自分にひきつけると共に、天来の恩恵によってユダヤ人の拒否した救いを、彼らにもたらされたのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 8～10)

1月14日

キリストはどの人の権利をも お認めになった

「神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました。」(使徒行伝 10:35)

主イエスはわたしたちがすべての人の権利を認めるように命じておられる。人間の社会的権利、クリスチャンとして権利が考慮されなければならない。すべての人は、神のむすこ娘として洗練と思いやりをもって扱われるべきである。

キリスト教は人を紳士にする。キリストは、ご自分の迫害者に対してさえ、礼儀正しくあられた。そしてこのお方に真に従う人々は同じ精神を表わすのである。為政者たちの前に連れ出されたときのパウロを見よ。アグリッパの前での彼の演説は説得力のある雄弁さと同時に真の礼儀の例証である。福音は世の流れに沿った形式的な礼儀ではなく、心の親切さからわきおこる礼儀を奨励する。

外面的な生活上の礼儀正しさに最高の注意を払ってみても、あらゆるいらだちや、手厳しい判断や、無作法な言葉を締め出すには十分ではない。真の洗練は、自己が最高の対象とみなされているかぎり、決して現われることがない。愛が心のうちに宿らなければならない。徹底したクリスチャンは、自分の行動の動機を主人に対する心からの深い愛より引き出す。キリストへの自分の愛情という根を通して、自分の兄弟たちへの無私の関心がわき起こる。愛はその持ち主に、品位、礼儀、ふるまいの美しさを与える。それは表情に輝き、声を抑える。それは存在全体を洗練し、高める。(福音宣伝者 123)

わたしたちが接触するようになるある人々は粗野で無礼かもしれない

が、それだからと言って、あなた自身が少しでも礼儀を欠いてはならない。自分自身の自尊心を保ちたいと願う者は、他の人々の自尊心を不要に傷つけることがないように気をつけなければならない。この規則は、最も鈍く、最も不注意な者に対しても神聖に守られるべきである。神がこれらの一見見込みのないように見える人々に対して、どのような意図を持っておられるかを、あなたは知らない。このお方は過去において、同じように見込みがなく魅力のない人々を、ご自分のために偉大な働きをなすものとして受け入れてこられた。このお方の御霊が心に働きかけて、すべての機能を命の活動へと目覚めさせてきた。主はこれらの粗くて切り出されていない石の中に、嵐や熱や圧力のテストに耐える貴重な素材をご覧になる。(同上 122)

接触する人々に対して礼儀正しくありなさい。こうしてあなたは神に対して礼儀正しくなるのである。このお方をそのいつくしみ深さのゆえに讃美しなさい。こうしてあなたはこのお方のための証人となり、天使たちの社会のために準備しているのである。あなたは这个世界において、天にあるキリストの家族の中で自分がどのようにふるまうべきかを学んでいるのである。(原稿 31, 1903 年)

1月15日

キリストは人をかたよりみないお方

「そこでペテロは口を開いて言った、『神は人をかたよりみないかたで』……（ある）ことが本当によくわかってきました。」（使徒行伝 10:34）

キリストの宗教は、受ける者を思想と行動の高地へ引き上げ、一方同時にそれは人類全体を一樣に、神のひとり子の犠牲によって買われた神の愛の対象として提示する。イエスの足元で富める者も貧しい者も学問のある者も無知な者も、身分制度や世俗の優位性を考えることなく共に会う。すべての地上の区別は、自分の罪が刺し通したお方を眺めるときに忘れられてしまう。天で非常に高められていたお方の自己否定、へりくだり、無限の同情は、人間の誇り、自己評価、社会的な身分制度を恥じ入らせる。純潔で汚れのない宗教は、真理によって聖化されるすべての人を一つにすることによって、その天来の原則を表わす。すべての人は一樣に自分たちを神へ贖ってくださったお方に依存する、血によって買われた魂として出会うのである。

主は人々に活用するためのタラントを貸し与えてこられた。主に金銭を委ねてこられた人々は、自分たちの資金というタラントを主人の許へ携えていかなければならない。感化力を持つ男女は、神が与えてくださったものを用いなければならぬ。主が知恵を授けてくださった人々は、この賜物をキリストの十字架の許へ携え、このお方の栄光のために用いていただかなければならない。

そして貧しい者は述べられた他のどのタラントよりも大きいかもしれないタラントを持っている。それは品性の単純さ、謙遜、試された徳、神への信頼かもしれない。忍耐強い労苦を通して、また彼らの完全な神への依存を通して、彼らは交わる人々にイエス、すなわち自分たちの贖い主を

指し示している。彼らは貧しい人々への同情に満ちた心や、困窮している人々や虐げられている人々のための家庭を持っており、イエスが彼らにとってどのようなお方であるかについての彼らの証は明白であり、確固としている。彼らは栄光と誉れと不死を求めているので、彼らの報いは永遠の命なのである。

人類の兄弟関係において、完全な全体をなすためにはあらゆる種類のタラントが必要である。そしてキリストの教会は様々なタラントの男女から、また様々な身分や階級から成り立っている。神は決して、ご自身の知恵が定められたもの一欠けるところのない全体をなすあらゆる階級の思いと、あらゆる様々なタラントの結合一を人間の誇りが分解するようには計画されなかった。神の偉大なみ働きのどの部分でも、代理人が高い身分でも低い身分でも、軽視するようなことがあるべきではない。すべての人に、それぞれの程度に応じて光を放つ役割がある。……わたしたちはみな共に人類という大きな織物に織り込まれているので、損失をこうむることなく、自分たちの同情を他の人々から差し控えることはできないのである。(福音宣伝者 330, 331)

1月16日

キリスト、真の礼儀の模範

「最後に言う。あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい。」(ペテロ第一 3:8)

キリストのために働く人々は、正直で信頼でき、原則に対しては岩のように堅固な人でなければならないが、同時に親切で礼儀正しくあるべきである。礼儀は御霊の特質の一つである。人の思いを扱うことは、かつて人に与えられた中で最大の働きである。そして心に触れる道を見出したいと思う者は、「憐れみ深くあれ、礼儀正しくあれ」との命令に注意を払わなければならない。愛は議論が成し遂げられないことを成し遂げる。しかし、一瞬の不機嫌や、一つのつっけんどんな答え、何か小さな事柄における一回のクリスチャンの礼儀や丁寧さの欠如が、友達も感化力も失う結果になるかもしれない。

この地上におられた時のキリストこそ、クリスチャンの働き人が目指すべきすがたである。このお方はそのしみのない純潔さにおいてばかりでなく、その忍耐、親切、そして気質の快活さにおいても、わたしたちの模範であられる。このお方の生涯は真の礼儀の例証である。このお方はいつも困窮している人々や虐げられている人々に優しいまなざしと慰めの言葉を持っておられた。このお方のご臨在は家庭によりきよらかな雰囲気をもたらした。このお方の命は社会の要素のただ中でパン種のように働いた。純潔で汚されることなく、このお方は思慮のない者、無礼な者、無作法な者の中を、不正な取税人、不義なサマリア人、異教の兵士、荒っぽい小作人、またより集まりの群衆の中を歩まれた。このお方は同情の言葉をここで一言、かしこで一言語られた。弱っている人が重荷を負うように迫られているのをご覧になると、このお方は彼らの重荷を共に負い、彼らに自然から

学ばれた神の愛や親切やいつくしみ深さについての教訓を繰り返された。このお方は最も粗野な絶望的な人々にも、神の子らしい品性に到達しようとの確証を与えて、望みをおこさせようと努力なされた。

イエスの宗教は気質がどれほど固く荒々しくても和らげ、態度がどれほど粗雑で鋭くてもなめらかにする。それは言葉をやさしく、態度を快活なものとする。キリストから、どのように純潔と高潔感の高さと、太陽のような気質の快活さを結合させるかを学ぼうではないか。親切で礼儀正しいクリスチャンは、キリスト教のために生み出すことのできる最も強力な論拠である。

親切な言葉は、魂にとって露ややさしい雨のようである。聖書はキリストについて、「疲れた者を言葉をもって助けること知」るために、恵みがその唇に注がれたと記されている。そして、主はわたしたちに、「聞いている者の益になる（恵みの助けとなる）ように」、「やさしい（恵みの）言葉を使いなさい」、とお命じになる。（福音宣伝者 121, 122）

真の礼節の神髄は他人のことを思いやることの中にある。（教育 284）

1月17日

キリスト、社交力における模範

「それから彼の家で、食事の席についておられたときのことである。多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。こんな人たちが大ぜいいて、イエスに従ってきたのである。」(マルコ 2:15)

神の子と自称している者はすべて、伝道者としていろいろな精神をもつ人たちとも交わるのであるということを考えておく必要がある。高尚な人、粗野な人、謙そんな人、高慢な人、宗教的な人、懐疑的な人、教育がある人、無知な人、金持、貧しい人がいる。こうした種々雑多な人を一様に扱うことはできない。しかしすべての者が親切と同情を必要としている。相互に交わることによってわたしたちの頭脳はみがかれ、高尚にならなければならない。人間は相互に依存しているものであり、人類家族のきずなによって密接に結び合わされている。……

キリスト教が世界と接するのは社交的関係を通じてである。神の光を受けたすべての男女は、よりよい道を知らない人が歩んでいる暗い道に光を放たなければならない。キリストのみたまによってきよめられた社交の力は、救い主に人を導くのに利用されなければならない。キリストは、きよい、美しい、たいせつな宝として、ひとりで楽しむために心の中に秘めておくべきものではない。キリストを心のうちに宿し、泉のように永遠の生命にまでそれを、ふきあふれさせ、接するすべての人を生きかえらすようではなければならない。(ミストリー・オブ・ヒーリング 481, 482)

キリストは友情の交わりの中で他の人々と混じることを拒まれなかった。パリサイ人や取税人に宴会に招かれたとき、このお方はその招きを受けられた。そのような機会に、このお方の語られた一つ一つの言葉は、聞く人々にとって命から命に至る香りであった。なぜなら、このお方は夕食の時間

を彼らの必要に応じて多くの貴重な教訓を与える機会とされたからである。キリストはこうにして、ご自分の弟子たちに、自分たちと同じように宗教的ではない人々の集まりの中にいるときに、どのように振る舞うべきかをお教えになった。ご自身の模範によって、キリストはどのような公の集まりの中にあっても、彼らの会話がよくそのような機会になされるような性質のものになる必要がないことをお教えになった。……

もしキリストが魂のうちに宿っておられるなら、心の宝庫から純潔で高めるような言葉が出てくる。もしキリストがそこに宿っておられないなら、満足は軽率さやからかいや冗談の中に見出され、それらは霊的な成長の妨げとなり、神の御使たちを悲しませるのである。舌は制せられていない肢体であるが、そうあるべきではない。それは改心したものとなるべきである。なぜなら、言葉のタラントは、非常に貴重なタラントだからである。キリストはいつでもご自分の富を与えようとしておられる。そしてわたしたちはこのお方から出る宝石を集めるべきである。それによって、わたしたちが語るときに、わたしたちのくちびるから宝石がこぼれるためである。」(教会への証 6 巻 173, 174)

1月18日

すべての者は キリストの精神と権威を表わすべき

「下役どもは答えた、『この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした。』」（ヨハネ 7:46）

イエスが、山上の垂訓を述べられたとき、このお方の弟子たちはこのお方のすぐそばに集まった。そして群衆も非常な好奇心に満たされて、できるだけ近くに押し寄せた。いつもにまさった何かが期待されていた。熱心な顔と聞こうとする態度は深い関心がある証拠であった。すべての人の注目は語り手に釘づけになっているかのようであった。このお方の目は言い表しようのない愛に輝いており、このお方のみ顔にあらわれた天来の表情が、語られる一つ一つの言葉に意味を与えた。天の御使たちも聴衆の中にいた。そこにはまた、魂の敵が彼の悪天使たちと共におり、できる限り、天来の教師の感化力を無効にしようと待ち構えていた。

そこで語られた真理は各時代を通じて伝えてこられ、全般的な誤謬の闇のただ中の光となってきた。多くの人々はその中に魂が最も必要としているもの—信仰と実践の確かな基礎—を見出してきた。しかし、世がかつて知っている中で最も偉大な教師によって語られたこれらの言葉は、人間の雄弁を並べたものではなかった。言葉は平易で、思想と所感はこの上ない単純さにぎわだっていた。貧しい者も、無学な者も、もつとも単純な思想の者も、それらを理解することができた。天の主は、憐れみと優しさのうちに、ご自分が救うために来られた魂に語っておられた。このお方は権威ある者として彼らに教え、永遠の命のみ言葉を語っておられた。

すべての人は、できる限り厳密に型であるお方を模倣すべきである。彼らはイエスがもっておられたような力の意識をもつことはできないが、力

の源であられるお方に密接につながるにより、イエスが彼らのうちに、また彼らがイエスのうちに宿ることができ、そのとき、このお方の御霊とこのお方の力が彼らのうちにあらわれるのである。

「彼が光の中にいますように、光の中を歩」きなさい。神から引き離すのは、世俗と利己心である。天からのメッセージは、反対を引き起こす性質のものである。キリストと真理のための忠実な証人は罪を譴責する。彼らの言葉は、火打石のような心を砕く鎚のようであり、かすを燃やし尽くす火のようである。絶えず、真剣で断固とした警告のメッセージがなくてはならない。神は義務に忠実な人々を持っておられる。正しい時に、このお方はエリヤの働きと同じような働きをするために、ご自分の忠実な使命者を遣わされる。(教会への証 5 巻 253, 254)

科学や芸術において最高の教育を受けた人々が、世の人々から無学のレッテルをはられているようないやしい身分のクリスチャンからとうとい教訓を学んできた。しかしこれらの無名の弟子たちは、すべての学校の中の最高の学校で教育を受けたのであった。彼らは、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」といわれているキリストの足下にすわったのであった(ヨハネ 7:46)。(各時代の希望上巻 312)

1月19日

十字架のうちにあらわされた 神の愛の啓示

「だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。」(ローマ 8:34)

人類に対する神の愛の啓示は十字架に集中されている。その完全な意義は言葉で表現することも筆で描写することも頭脳で理解することもできない。カルバリーの十字架をながめ、わたしたちはただ、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それはみ子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とだけ言えるのである。

キリストはわたしたちの罪のために十字架にかかり、死からよみがえり、昇天なさったことが、わたしたちが学び、また教えねばならない救いの科学である。……

「キリスト・イエスは、死んで、否よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ 8:34)。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル 7:25)。……

わたしたちがどんな恵みを受けるのもすべてキリストというたまものを通してである。このたまものを通して、日々、神の恵みが尽きることなくわたしたちに注がれる。美しい色彩とかおりを持った花はみな、このたまものを通じてわたしたちが喜ぶために与えられている。日も月もキリストによって造られた。天を美しくしている星は一つとしてキリストによって造られぬものはない。降り注ぐ雨のしずく、感謝の気持ちのないこの世界に照る日の光はすべてキリストの中にある神の愛を証明している。すべてのものは、

この言い尽せぬたまものである神のひとり子を通してわたしたちに与えられている。これらの恵みがすべて、神の被造物に満ちあふれるためにキリストは十字架につかれたのであった。

「どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」(ヨハネ第一 3:1)。……

キリストの中にあらわされている神の知識は、救われた者が皆持たねばならないものである。それは品性を変化させる知識である。この知識を受けるとき人間は神のかたちに似て再創造される。それは全身に神聖な霊の力を与える。……

救い主はご自分の生涯について、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので」(ヨハネ 15:10)「わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言われている(同上 8:29)。神のしもべが人性をとられたイエスのようになることを神は求めておられる。救い主の力によって、わたしたちは救い主が送られたような純潔で、りっぱな生活を送らなければならない。(ミストリー・オブ・ヒーリング 399～401)

岩なるキリスト・イエスのうちに、わたしたちの唯一の安全がある。(上を仰いで 293)

1月20日

キリストの栄光がどろぼうの上に輝く

「そして言った、『イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください。』」（ルカ 23:42）

十字架上で苦しんでおられるイエスにかすかな慰めの光が一すじさしてきた。それは悔い改めたどろぼうの祈りであった。イエスといっしょに十字架につけられた男たちはふたりとも、最初イエスをののしっていた。ひとり、苦しみのあまりますます絶望的な反抗を示すばかりであった。

しかしもうひとりの仲間はそうではなかった。この男は常習犯ではなかった。彼は悪い仲間たちにさそわれて道をふみはずしたのであったが、十字架のそばに立って救い主をののしっている人たちの多くよりも罪が軽かった。彼はかつてイエスを見、イエスのことばを聞き、その教えによって自覚させられたが、祭司たちと役人たちのためにイエスから離れてしまった。彼は、罪の自覚をおしころそうとして、ますます罪の深みにとびこみ、ついに捕えられて犯罪者としてさばかれ、十字架の死を宣告されたのであった。

法廷でも、カルバリーへの途中でも、彼はイエスといっしょだった。彼はピラトが、「この人になんの罪も見いだせない」と断言するのを聞いた（ヨハネ 19:4）。彼はイエスの神々しい態度に目をとめ、イエスが迫害者たちをあわれんでゆるされるのを見た。十字架上で、彼は多くのえらい宗教家たちが、侮辱的なことばを浴びせ、主イエスをあざけるのを見る。彼は揺れる頭を見る。彼は仲間のどろぼうが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と非難することばを聞く。

通りかかった人々の中で、多くの人がイエスを弁護するのを、彼は耳にする。彼らがイエスのことばをくりかえし、イエスのみわざについて語るの

を、彼は聞く。これがキリストだという自覚が彼の心によみがえる。……しかもいま、罪にけがれたままに彼の一生の経歴がとじられようとしている。彼はうめきながら言う、「お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない。」……

しかしいま、ふしぎな、やさしい思いがわきあがってくる。彼は、イエスが病人をいやし、罪をゆるされたことなど、イエスについて聞いたことをみな心に思い起こす。……聖霊は彼の心を照らし、すこしずつ証拠の鎖がつながる。打たれ、あざけられ、十字架にかけられているイエスのうちに、彼は、世の罪をとり除く神の小羊を見る。死にかけている無力な魂が、瀕死の救い主に身をまかせると、彼の声には苦悩の中に望みがまじる。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と、彼は叫ぶ。

すぐに応答があった。その調子はやわらかく、音楽のようで、そのことばは愛とあわれみと力に満ちていた。きょう、よく言っておくが、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。……

イエスは、弟子たちから何か信仰のことばを聞きたいと耳をすまされた。……だから、この死にかかったどろぼうが口にした信仰と愛のことばは、救い主にとってどんなにうれしかったことだろう。(各時代の希望下巻 267～271)

1月21日

わたしたちの模範として キリストはすべてのすべて

「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。」(ヨハネ 1:4)

福音によって繰り返し教えられる倫理は、神のみ思い、すなわち神のご意志の完全さ以外の標準を認めていない。神はご自分の被造物がご自分の意志に一致することを求めておられる。品性の不完全は罪であり、罪は律法の違反である。品性のあらゆる義の特質は、神のうちに、完全で調和した全体として宿っている。キリストを自分の個人的な救い主として受け入れるすべての人は、これらの特質を持つ特権が与えられている。これが聖潔の科学である。

墮落した人類の前におかれた可能性はなんと栄光に満ちていることであろう!ご自分の御子を通して、神は人が到達できる卓越さを明らかにして下さった。キリストの功績を通して、人は自分の墮落した状態から引き上げられ、精錬され、オフルの黄金よりも尊いものとされることができる。人は栄光のうちにある御使たちの仲間となり、イエス・キリストのみかたちを反映し、永遠の御座の明るい光輝のうちに輝くことさえできる。キリストの力を通して自分が不死のものとされるという信仰を持つことができる。しかしなお、人は、神に一步ごとに導いていただくならば到達できるはずの高さを悟ることが、なんとまれなことであろう!

神はすべての人間に自分の個性を働かせることを許しておられる。このお方はだれかが自分の思いを死すべき同胞の思いに没入させることを望まれない。思いと品性の変化を願う者は、人ではなく、真正な模範を見るべきである。神は次の招きを与えておられる、「キリスト・イエスにあるその

思いが、あなたがたのうちにあるようにしなさい」。改心と変化によって、人はキリストの思いを受けることができる。すべての人は神のみ前に、個人的な信仰、個人的な経験をもって、自分自身で栄光の望みであられるキリストがうちに形づくられていることを知って、立つべきである。わたしたちがだれか人の模範に倣うことは、それが品性においてほとんど完全だと思われている人であっても、自分の真理を欠陥のある人間、すなわち完全の一点一画も与えることのできない存在に信頼をおくことになる。

わたしたちの模範として、わたしたちには、すべてのすべてであられるお方、万人にぬきんでたお方、その卓越さが比類なきお方がおられる。このお方は恵み深くも、ご自分の命を全世界的な模倣に適合するものとして下さった。キリストのうちに、富と貧しさ、大権と謙虚、無限の力と柔和と低さがあり、それはこのお方を受け入れるすべての魂のうちに反映されるのである。このお方のうちに、人間の思いの資質と力を通して、世がかつて知った中で最大の教師の知恵が表されている。

世の前に、神は、キリストの恵みを通して男女がどのようになれるかについての生きた証人として、わたしたちを発育させておられる。(サインズ・オブ・タイムズ 1902 年 9 月 3 日)

1月22日

キリストは真理であられる

「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない』。(ヨハネ 14:6)

キリストは真理であられる。キリストのことばは真理であって、そこには表面に表われた以上の深い意味がこめられている。すべてキリストの言われたことは、一見みばえはなかったが、その外見に似合わぬ価値があった。聖霊によって心を開かれた者は、これらのことばの価値をさとり、たとえ、これらが隠された宝であっても真理の宝石であることを認める。

神のことばは、人間の理論や思索によっては、とうてい理解することはできない。自分は哲学がわかると思っている人びとは、知識の倉を開き、教会を異端から守るためには、自分たちの説明がどうしても必要だと考える。ところが、このような説明が、かえって、誤った理論と異端を持ちこむ結果になった。人は、こみいつていると思われる聖句をなんとかして説明しようと努めたが、それは、明りようにしようとしてかえってわかりにくくしてしまったのである。

祭司やパリサイ人たちは、神のことばに彼らの解釈をつけて、偉大なことをしているように思っていた。しかし、キリストは、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか」といわれた(マルコ 12:24)。また、あなたがたは「人間のいましめを教として教え」といっていると、お責めになった(同上 7:7)。彼らは、神のことばの教師であり、それに精通しているはずであつたにもかかわらず、みことばの実行者ではなかった。サタンが、彼らの目をくらましていたために、ことばの真の意味をさとることができなかった。

今日、多くの人がこれと同じことをしている。多くの教会が、この罪に陥っている。今日のいわゆる知者、学者といわれる人びとが、昔のユダヤ人の教師たちと同じ経験をくり返す危険が多分にある。彼らが、神のことばを偽って解釈するために、人びとは、神聖な真理についての彼らの誤った思想にまどわされて、暗黒の中に閉ざされてしまう。

聖書は、伝説とか人間の思索などといった薄暗い光のもとで読む必要はない。聖書を人間の伝説や想像によって説明することは、あたかも、太陽の前に、たいまつをかざすようなものである。神のきよいことばは、地上のたいまつ微光によって照らされる必要はない。聖書それ自体が光であり、神の栄光のあらわれである。聖書と比べるならば、どんな光もその輝きがあせてしまうのである。(キリストの実物教訓 85, 86)

わたしたちがみな必要としているのは、……真理、すなわち愛によって働き、魂をきよめる真理である。(上を仰いで 293)

1月23日

キリスト、 すべての人のための完全な模範

「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」(ルカ 2:52)

人類は墮落した。人類のうちにある神のみかたちは損なわれている。不従順によって、彼は傾向において墮落し、力において弱まり、行く手には苦難と怒りしか見ることができないように思われた。しかし、神はキリストを通して、逃れの道を備えて下さり、そしてすべての人に「それだから、あなたがたも完全な者となりなさい」と言われる。人類がご自分の前に正しく高潔なものとして立つようにというのが、このお方のご目的であり、このお方は失敗することがない。このお方はご自分の御子をこの世に遣わして下さり、罪の刑罰を負わせられ、どのように罪のない生涯を送るかを人類に示されたのである。

キリストはわたしたちの理想であられる。このお方は子供のために、青年のために、成人のために、完全な模範を残してくださった。このお方はこの世に来られ、人類の経験のさまざまな段階を経験された。このお方の生涯に罪の場所はなかった。ご自分の地上生涯の初めから終わりまで、このお方は神へのご自分の忠誠を汚さず守られた。み言葉はこのお方について、「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」と述べている。このお方は「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」。

救い主はご自分を喜ばせるために生きられなかった。……この世でこのお方には家がなく、ただその友人が親切で提供してくれるだけであったが、このお方のご臨在のうちにいるとき、そこは天国であった。日々、このお

方は試練と誘惑にあわれたが、このお方は失敗することも失望することもなかった。このお方はいつも忍耐強く快活であつたので、苦しんでいる人々はこのお方を命と平安と健康の使者としてほめたたえた。このお方の生涯に純潔で高貴なもの以外はなかった。……

神のみ約束は、「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである」である。聖潔とは、神の栄光の反映である。しかし、この栄光を反映させるためには、わたしたちは神と協力しなければならない。心と思いが悪へ導くすべてのものから空にされなければならない。神のみ言葉が、霊的な力を得たいとの真剣な願いを持って読まれ、研究されなければならない。このみ言葉は天のパンである。それを受け、自分たちの生活の一部とする人々は、神の力のうちに強く成長する。わたしたちの聖化は、わたしたちに対する神のすべての取り扱いのご目的である。このお方はとこしえより、わたしたちが聖なるものとなることができるように、わたしたちを選ばれた。キリストは「神のみこころは、あなたがたが清くなること（聖化）である」と宣言なさる。あなたがたの願望と傾向が神聖なみ旨に一致させられることは、あなたの意志でもあるであろうか。

救い主の生涯を送ること、すべての利己的な願いに打ち勝つこと、雄々しく快活に神と自分たちの周囲にいる人々への義務を果たすこと—これらはわたしたちを勝ち得て余りある者とする。これによってわたしたちは大いなる白い御座の前に、しみもしわもなく、品性の衣を洗って、それらを小羊の血で白くして立つ準備ができるのである。（サインズ・オブ・タイムズ 1904年3月30日）

1月24日

キリスト、「平和の君」

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」(マタイ 5:9)

キリストは「平和の君」である(イザヤ書 9:6)。キリストのみわざは、罪が破壊した平和を天と地に回復することである。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」(ローマ 5:1)。だれでも罪と絶縁することに同意し、キリストの愛に心を開く者は、この天の平和を持つ者となる。

これ以外に平和の基はない。心に受け入れられたキリストのめぐみは、敵意をしずめる。それは争いをしずめ、魂に愛を満たす。神との平和また隣人との平和を保っている者は、決して不幸になることはない。彼の心には嫉妬(しつと)はない。そこには悪意のはいる余地がない。憎悪も存在しえない。神と調和している心は、天の平和の共有者である。そして周囲のすべての者に、その祝福された感化を及ぼすのである。平和の精神は、世の争いに疲れ、悩む人々の心に、露のようにとどまる。キリストに従う者たちは平和のメッセージをもって世につかわされている。きよい生活の静かな無意識の感化によってキリストの愛をあらわし、ことばと行為によって、他の人に罪をすてさせ、心を神にささげるように導く者は、平和をつくり出す人である。

「平和をつくり出す人たちはさいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」。平和の精神は彼らが天と結びついている証拠である。キリストの芳しいかおりが彼らをとりまいている。その生活のかおり、その品性の美しさは、彼らが神の子らである事実を世に示している。人々は彼らがイエ

スと共にいたことを知るのである。……

「その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、人によらず、また人の子らを待たずに主からくだる露のごとく、青草の上に降る夕立のようである」(ミカ書 5:7)。(祝福の山 33～35)

イザヤはメシヤの誕生を預言して、彼を「平和の君」と呼んだ。また天使たちは、キリストの誕生を羊飼いたちに告げたとき、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」とベツレヘムの平原の上で歌った(ルカ 2:14)。

これらの預言の言葉と、「平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきた」というキリストの言葉との間には、一見、矛盾があるように思われる(マタイ 10:34)。しかし、正しく理解されるならば、この二つは完全に一致している。福音は平和のメッセージである。キリスト教は、それを受け入れて従うならば、全地を平和と一致と幸福で満たすものである。キリストの宗教は、その教えを受け入れるすべての者を親しい兄弟関係に入れる。イエスの使命は、人々を神と和解させ、そしてお互いに和解させることであった。(各時代の大争闘上巻 40)

1月25日

キリストのうちに表された神の個性

「わたしと父とは一つである。」(ヨハネ 10:30)

神は有形の実在者たる神としてご自身をみ子の中にあらわされた。父の栄光の輝きであり、「神の本質の真の姿」であるイエスは実在者である救い主としてこの世にこられた(ヘブル 1:3)。彼は個性を持たれる救い主として天にのぼり、個性を持たれる救い主として執り成しておられる。神のみ座の前でわたしたちのために「人の子のような者」として奉仕されている(黙示録 1:13)。

世の光であるキリストはその神性の、目もくらむ光を隠して人間となり、人間の間に住むためにこられたが、それは人間が焼き滅ぼされることなく、創造主に親しめるようになるためであった。罪が人間と創造主とを離反させて以来、キリストを通して神がおあらわれになる以外に、だれも神を見た者がなかった。

「わたしと父とは一つである」とキリストは言われた(ヨハネ 10:30)。また、「子を知る者は父のほかにはなく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ 11:27)。

神が人間に知らせたいと思っておられることを教えるためにキリストはこられた。高い天に、地に、広い海に神のみ手のわざをわたしたちは見るのである。全被造物は神の力と知恵と愛を証明している。しかし、星や海や瀑布などからは、キリストのうちにあらわされているほどの神の性質を学びとることはできない。

神の個性と品性を描写するには自然界よりもさらに明りように表わすものが必要であることをごらんになり、神のみ子を世につかわし、見えざる神の性質や属性を人間の目にたえられる程度に表わされたのであった。……

キリストは人性をとり、人間と一つになるためこの世にこられたが、同時にそれは罪深い人類に天の父を示すためであった。世の初めから父の前にあつて、目に見えない神の本質の真の姿であつたキリストだけが神の品性を人間に示すことができたのである。彼はすべての点で兄弟のようになり、わたしたちと同じ肉体をお持ちになった。キリストは飢えかわき、疲れを体験された。食物によってささえられ、睡眠をとって元気を回復された。彼は人間の分け前を受け、しかも神の傷なきみ子であつた。……優しく、あわれみ深く、同情に富み、つねに他人のことをお考えになった点で、キリストは神の品性を示し、神と人とのいつも奉仕なさっていた。(ミストリー・オブ・ヒーリング 393 ～ 398)

贖いの主題は、永遠の年月にわたって、贖われた者の思いと舌を要する。神の栄光の反映が、永遠に救い主のみ顔から輝き出るのである。(手紙 1904 年, 280)

1月26日

イエスはわたしたちの模範であられる

「こうして、あなたがたは、神に愛されている子供として、神にならう者になりなさい。」(エペソ 5:1)

神の見張り人はどのように人々を喜ばせるかを研究したり、また彼らの言葉を聞き、それらを語ることをも研究したりしてはならない。なぜなら、彼らは主が何と仰せになるか、民のための主の言葉は何かを聞かなければならないからである。もし彼らが何年も前に用意された説教に頼るなら、機会の必要に応じることができないであろう。彼らの心は開かれて、主が彼らの思いに印象を与えることができるようにされるべきである。そのとき、彼らは民に天からのあたたかい貴重な真理を伝えることができる。……

見張り人の働きにおいてことごとく、あまりにも御霊と神の力が少なすぎる。ペンテコステのすばらしい集会を特徴づけた御霊は、今神の大使として生ける者と死せる者の間に立っている人々の上にその力を表そうと待っている。1844年の運動においてあのように力強く民をかきたてた力が再び表されることになる。第三天使のメッセージは、ささやくような調子ではなく、大いなる叫びをもって出ていくのである。

大いなる光をもっていると公言している多くの人々は、自分自身のひらめきともし火の内を歩んでいる。彼らは祭壇からの炭火をくちびるにふれていただく必要がある。こうして彼らが靈感を受けた人のように真理を注ぎ出すことができるためである。……

キリストが王の威光のうちに、地上の偉人たちに伴う見せびらかしをもって来られたならば、多くの人々はこのお方を受け入れたことであろう。しかし、ナザレのイエスは外見的な栄光の見せびらかしをもって感覚をくらませ、それを彼らの敬虔の基礎とすることはなさらなかった。このお方は

人類の贖い主として来られたのと同様に、教師また模範者となるためにつましい人として来られた。もしこのお方が見せびらかしを奨励していたなら、もし地上の偉人の従者を従えて来られたなら、このお方はいかにして謙遜を教えることがおできになったであろうか。いかにして山上の垂訓のような燃える真理を提示することができたであろうか。このお方の模範は、ご自分に従うすべての者に模倣してほしいと願っておられるものであった。もしこのお方が称賛のうちに来られ、地上の王のように住まわれたとしたら、生活において低い人々の希望はどこにあるであろう。

イエスは世が知っているよりもよく彼らの必要をご存じであった。このお方は天の正装をまとった天使としてではなく、人として来られた。しかし、このお方の謙遜には、人々にこのお方を愛しながらも畏怖を覚えさせた先天的な力と偉大さが結びついていた。そのような麗しさ、そのような控えめな外見であったにもかかわらず、このお方は彼らのあいだを天来の王の尊厳と力をもって行動された。人々は驚き、当惑した。彼らは事の理由を探そうとした。しかし、自分自身の考えを捨てることを望まず、自分たちの疑念に屈して、救い主が地上の偉大さをもって来られるという昔の期待にしがみついた。(教会への証 5 巻 252, 253)

1月27日

イエスは品性の型を備えられた

「あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。」(コロサイ 3:3, 4)

あなたがたの光を良いわざのうちに輝かせなさい。キリストは、「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである」と言われた。わたしは多くの人々がこの状態であることを恐れる。すべての人がなすべき同じ働きをもっているわけではない。さまざまな状況とタラントが、個人を神のぶどう畑のさまざまな種類の働きのために資格を与えておられる。ある人は他の人々よりもより責任のある地位を占める。しかし、各人にその人の働きが与えられている。そしてもしその人が自分の働きを忠実に熱心に行うならば、彼は神の恵みの忠実な管理人なのである。

神はあなたの光が輝いて、あなたの良い言葉やわざが人の賞賛をあなた自身にもたらすようにと意図されたのではない。そうではなく、あらゆる善の創始者であられるお方が栄光を受け、高められるべきである。イエスは、そのご生涯において、人に品性の模範をお与えになった。世はこのお方に対して、世の標準に従ってご自分を形づくらせようとしたが、なんと力がなかったことであろう! その感化力はことごとくふり捨てられた。このお方は、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と宣言された。もしわたしたちがこのお方の栄光だけに目をとめて、神のみわざにこの献身をなすなら

ば、わたしたちはキリストと共に、「わたしは自分の栄光を求めてはいない」と言うことができる。このお方のご生涯は良いわざに満ちていた。そしてわたしたちの偉大な模範が生きた通りに生きることがわたしたちの義務である。わたしたちの命は、キリストと共に神のうちに隠されていなければならない。そのとき、光がイエスからわたしたちに反映し、わたしたちはそれを自分たちのまわりにいる人々に、ただ話や公言によってではなく、良いわざによって、またキリストのご品性を表すことによって、反映させるのである。神の光を反映させる人々は愛すべき気質を大事にする。彼らは快活に、自発的に、神のすべての戒めに対して従順である。彼らは柔和で自己犠牲的で、魂の救いのために献身的な愛をもって働く。……

真に光を担うすべての人々は、他の人々の道に光を反映する。キリストの御名をもって唱えられる人々はすべての悪から離れなさい。もしあなたが神のご要求に従い、このお方の愛が染みわたる者となり、このお方の満ちみちた徳に満たされるなら、子供たち、青年たち、若い弟子たちは、あなたを見て、何が实际的な信心を構成しているかについて自分たちの印象を受けるであろう。こうしてあなたは、彼らを神への従順の道へ導く手段となることができる。あなたはそのとき、神のテストに耐える感化力を働かせるのである。そしてあなたの働きは金、銀、宝石に比べられるものとなる。なぜなら、それらは不朽の性質のものだからである。(レバ・アンド・ハラド 1888 年 10 月 16 日)

1月28日

キリストは 弟子たちの思想を満たされた

「人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め」(使徒行伝 4:13)

アダムの墮落以来、キリストは、選ばれたしもべたちにみことばの種をゆだね、人々の心にそれを植えつけさせられた。この地上での生涯をかけて、キリストは真理の種をまき、ご自身の血でそれを潤された。ペンテコステ(五旬節)の日に起こった人々の改心は、この種まきの結果であり、キリストの教えの力を現すキリストの働きの収穫であった。……

キリストの訓練のもとに、弟子たちは聖霊を必要と感ずるように導かれていた。聖霊の教えにより、彼らは最終的な資格を受けて、彼らの生涯をかけた仕事に出て行った。もはや彼らは無学ではなく、無教養でもなかった。もはや彼らはてんでんばらばらな一団ではなく、また、不調和で矛盾した分子の寄り集まりでもなかった。もはや彼らの望みは、世的な成功を目指すものではなかった。彼らは「心をついにし思いをついにした(使徒行伝 2:46, 4:32)。キリストが彼らの思想となり、キリストの国の前進が彼らの目標であった。彼らは心も品性も主に似たものとなっていた。そして人々は「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た。

ペンテコステは彼らに天の啓示をさずけた。キリストと共にいたときには理解できなかった真理が、いま明らかにされた。彼らはこれまで知らなかった信仰と確信を与えられて、聖なるみことばについての教えを受け入れた。キリストが神のみ子であるということは、もはや彼らにとって信仰の問題ではなかった。主が、たとえ人間性を身につけておられても、本当に、

メシヤであられることを彼らは知っていた。そして、神が彼らと共におられるのだという確信をもって、世に自分たちの経験を堂々と語った。

弟子たちはイエスのみ名を、確信をもって語ることができた。それは、イエスが彼らの友であり、兄であられたからではなかっただろうか。キリストとの親しい交わりに導かれて、彼らは主と共に天に備えられた場所に座った。キリストをあかしするとき、弟子たちの思想を包んだのは、すさまじく燃えることばであった。弟子たちの心には豊かな深い愛、どこまでも広い慈愛が積みすぎるほど積みこまれていたため、キリストのみ力をあかししに、地の果てまでも行かずにはおられなかった。弟子たちは、キリストが始められたみ働きを進展させたいという、切なる願いでいっぱいであった。彼らはまた、神の恩義の大きさと、彼らの仕事の責任の大きさを悟った。聖霊の賜物に力づけられて、彼らは、十字架の勝利を更にひろげたいという熱意に燃えて出て行った。聖霊は彼らを活気づけ、彼らを通して語った。キリストの平和が彼らの顔から輝き出た。彼らの生涯を奉仕のために主にささげていたので、その顔には神にゆだねきった表情があらわれていた。
(患難から栄光へ上巻 40 ～ 42)

1月29日

キリストは天の富を明らかにされた

「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、」（イザヤ 61:1）

キリストのような伝道者は、まだ一度も現われたことがなかった。彼は天の王であられたのに、人々のいるところに行って彼らに接するために、へりくだって人性をお取りになった。富める者にも、貧しき者にも、自由な者にも、縛られた者にも、すべての人にとって契約の使者であるキリストは、救いの音信をたずさえてこられたのである。大治癒者としての名声はパレスチナ全体にひろがった。病人は助けを求めようと、キリストのお通りになるところにきた。また彼のみ言葉を聞き、み手にふれるために、多くの者が熱心に集まってきた。こうして彼は、町から町へ、村から村へ福音をのべ伝え、病人をいやして歩かれたが、それは貧しい人間の姿をした栄光の王だったのである。

彼は、ユダヤの国の大祭においでになって、外面的な儀式に夢中になっている群衆に向かって、天のことを語り、彼らに永遠を思わせるようになさった。すべての者に、彼は知恵の倉から宝をおあたえになった。そうした人々が必ず理解できるように単純な言葉だけお語りになった。彼は独特な方法ですべての悲しむ者や悩む者をお助けになった。彼はやさしく、ていねいなしとやかさで罪に悩む人々に奉仕し、いやしと力をお与えになった。……

キリストはなんと忙しい生活をお送りになったことだろう。毎日、貧しい者や、悲しむ者の伏せ屋を訪れて、絶望した者に希望をお語りになり、悩

む者には平安をおあたえになった。彼は恵み深く、やさしく、また、あわれみぶかい心で、悲しみに沈んだ者を元気づけ、嘆く者を慰めてお歩きになった。そして、行くさきざきいたる所で祝福をお与えになった。

彼は貧しい人々のためにお尽しになる一方、金持の人々の心にも接近する方法をお学びになった。このため裕福な教育のあるパリサイ人や、ユダヤの貴族や、ローマの総督にも交際をお求めになった。また、彼らの招待をうけ、宴会にも出席なさりなどして、人々の興味と職業を親しくご存じになると共に彼らに近づいて、不滅の富をお示しになった。

キリストは人間が天から力を受けてはじめて、けがれのない生涯が送られるのだということを示すために、この世においでになったのである。そして不屈の忍耐と同情をもって人々を助け、彼らの必要を満たされた。彼はやさしい手をもって人の心から不安や疑惑を一掃し、敵意を愛に、不信を信頼にお変えになった。……

彼のみ声が発せられると、……貪欲と野心的な精神は彼らの心から逃げ去った。こうして人々は自由の身となり、救い主に従うために立ち上がった。(ミストリー・オブ・ヒーリング 6～8)

1月30日

キリストに従う者は、 キリストより大きいわざをする

「よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。」(ヨハネ 14:12)

このように言われたのは、弟子たちがキリストがなされた以上に立派な仕事をするというのではなく、弟子たちの働きがより大きくひろがっていくであろうという意味であった。主は奇跡を行うことばかりでなく、聖霊の働きのもとに行われるすべてのわざに注意をひかれたのである。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである」と主は言われた(ヨハネ 15:26,27)。

このみことばはすばらしく成就した。聖霊が降下したのち、弟子たちは主と、主が身代わりとなって死なれた人々に対する深い愛に満たされたので、弟子たちの語ることばやささげる祈りによって、人々の心は解かされたのである。弟子たちは聖霊の力によって語り、その力の感化によって幾千もの人々が改心した。

キリストの代表者として、使徒たちはこの世に決定的な印象を与えなければならなかった。彼らが身分の低い人々であったということは、彼らの感化力を減少させず、かえってそれを増した。聞く人々の心は弟子たちから救い主へと導かれた。たとえ目には見えなくとも、主は今もなお、弟子たちと共に働いておられたからである。使徒たちのすばらしい教えや、勇氣と信頼に満ちたことばは、彼らの働きが自分たちの力でなされているの

ではなく、キリストの力でなされているのだということをすべての人々に確信させるのである。彼らは、謙遜に、ユダヤ人が十字架につけたおかたこそいのちの君、生ける神のみ子であることを言明する。そのおかたの名によって、主が行われたみわざを受け継いで行っているのであると、弟子たちは公言するのである。

救い主は十字架におつきになる前夜、弟子たちに別れのことばを述べられたが、その中でご自分が耐えてこられた苦難と、またこれから耐えねばならない苦難については一言も触れられなかった。主はご自分の前にある屈辱についてお語りにならずに、弟子たちの信仰を強めるものを彼らの心に与え、勝利者のために備えられているよろこびを待ち望むようにし向けられた。これまで約束されたことよりもっと多くのことを、弟子たちのためになさることができるということ、また、主から愛とあわれみが流れ出て魂の宮をきよめ、人々を主に似た品性の者とするということ、また、み霊の力によって武装された主の真理が、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出て行くのだということを知って、主はよろこばれた。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」とキリストは言われた（同上 16:33）。（患難から栄光へ上巻 15, 16）

1月31日

キリスト、救う恵みの水路

「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており」(コロサイ 2:9)

キリストはご自分の人性によって人類に接し、ご自分の神性によって神のみ座をとらえておられた。人の子としてイエスは服従の模範をわれわれに示された。神のみ子としてイエスは服従する力をわれわれに与えてくださる。……

身をひくくして人性をとることによって、キリストはサタンの品性と反対の品性をあらわされた。……

当然キリストが受けられるべき取り扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべき取り扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた。「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

キリストは、ご自分の生涯と死によって、罪のために生じた破滅から回復するよりもっと大きなことをなしとげられた。神と人とを永遠にひき離すことがサタンの目的であった。しかしキリストのうちにあるときに、われわれは墮落しなかった場合よりもっと密接に神につながるようになるのである。救い主は、われわれの性質をおとりになることによって、決してたちきれることのないきずなでご自分を人類にむすびつけられた。永遠にわたって、キリストはわれわれとつながっておられる。……神は不変の平和のはからいを保証するために、ご自分のひとり子を与えて人類家族の一人と

ならせ、永遠に人間の性質をみ子のうちに保たせられた。……神はみ子自身のうちに人間の性質をとり入れ、これを一番高い天にまで持ちつづけさせられた。神とともに宇宙のみ座を占めておられるのは「人の子」である。その名を「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられるのは「人の子」である（イザヤ書 9:6）。……「キリストのうちに、天の家族と地の家族が一つにむすばれている。栄光をお受けになったキリストは、われわれの兄弟である。天は人間のうちに宿り、人間は限りない愛の神の胸にいだかれている。……

キリストのあがないの働きによって神の統治の正しいことが証明される。全能者は愛の神として知らされる。サタンの非難は反ばくされ、その性格がばくろされる。反逆はふたたび起ることができない。罪は二度この宇宙にはいることができない。永遠にわたって、だれも背信の心配がない。愛の自己犠牲によって、天と地の住民は決してきれることのないきずなで創造主にむすびつけられる。

あがないの働きは完成される。罪の充満していたところに神の恵みがもって充満する。……罪ののろいのために神の輝かしい創造における一つの汚点となっていたわれわれのこの小さな世界が、神の宇宙のどんな他世界にもまさってあがめられる。（各時代の希望上巻 9 ～ 13）

研究 7

三重のメッセージ



第一天使のメッセージ

Part VI

「二千三百の夕と朝までである。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」(ダニエル 8:14 英語訳)。

「聖所の清めとは何であろうか。旧約聖書の中には、地上の聖所に関連してそのような務めがあったということが記されている。しかし、天に何か清められなければならないようなものがあるであろうか。ヘブル九章には、地上の聖所と天の聖所の両方の清めについて、はっきりと教えられている。……

清めは、型の務めにおいても本体の務めにおいても、血によって成し遂げられなければならない。型においては動物の血によって、本体においてはキリストの血によってである。

清めは物質的な汚れを取り除くことではなかった。なぜなら、それは血によって成し遂げられることであり、そうであればそれは罪からの清めに違いなかった。

しかし、天にしろ、地上にしろ、いったい罪が聖所と関係があるであろうか。

人々の罪は、昔は象徴において、罪祭の血によって地上の聖所に移された。これと同様に、实际的に、わたしたちの罪がキリストの血によって天の聖所に移されるのである。そして地上の型における清めがそれまで聖所を汚していた罪を取り除くことによって成し遂げられたように、実際の天の聖所の清めもそこに記録された罪を取り除くこと、あるいは除去することによって成し遂げられるのである。そのために、罪の悔い改めとキリ

ストを信じる信仰を通して、だれにこのお方の贖罪の功績にあずかる資格があるかを決定するために、記録の書を吟味する必要がある。

そのとき〔最後の報酬の大いなる日には〕、キリストの贖罪の血の功績によって、真に悔い改めたすべての人の罪が天の書から除去されるのである」(信仰によって私は生きる 206)。

「ダニエル 8:14 に記されているキリストがわたしたちの大祭司として、聖所の清めのために至聖所に来られること、ダニエル 7:13 にある日の老いたる者のもとに人の子がこられること、そしてマラキによって預言されたこのお方の宮に主が来られることは同じ出来事の描写である。そしてこれはまたキリストがマタイ 25 章の 10 人のおとめの譬の中で説明された花婿が婚宴(結婚式)に来ることによっても表されている。

聖所の清めには、……調査の働き、すなわち裁きの働きが関与している。この働きはご自分の民を贖うためにキリストが来られる前になされなければならない。なぜなら、このお方が来られるときには、すべての人にそのわざに応じて授けるべき報いを携えて来られるからである」(信仰によって私は生きる 207)。

「大いなる最後の報いの日に、死者は、「そのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれ」る(黙示録 20:12)。このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、きよめられるのである。象徴においては、この大いなる贖罪のみわざ、つまり、罪を消し去ることは、贖罪の日のつとめによってあらわされた。すなわち、地上の聖所を汚していた罪を除いてきよめることは、罪祭の血によってなしとげられた。真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された」(人類のあけぼの上巻 422, 423)。

「キリストの犠牲と祭司職の影であった、型としての制度において、聖所の清めは、年ごとの奉仕において大祭司が行なう最後の務めであった。それは、贖罪の最後の働き、すなわち、イスラエルから罪を取り除くこと

であつた。それは、天の記録に記されている神の民の罪を除く、あるいは消し去るという、天の大祭司の奉仕における最後の働きを予表していた。この務めには、調査の働き、審判の働きが含まれていた。そして、それは、キリストが力と大きな栄光のうちに天の雲に乗って来られる直前に起こる。なぜならば、彼が来られる時には、すべての人の運命は決定しているからである。イエスは、「報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」と言われる（黙示録 22:12）。黙示録 14:7 の「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という第一天使の使命の宣言は、再臨直前のこの審判の働きを言ったものである」（各時代の大争闘下巻 46）。

「聖所問題……は、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかに……した」（各時代の大争闘下巻 138）。

再臨信仰の柱

「聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱であつたものは、「二千三百の夕と朝までである。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という宣言であつた（ダニエル書 8:14 英語訳）。この聖句は、主がまもなく来られることを信じたすべての信徒がよく知っていた言葉であつた。この預言は、信仰の合い言葉として、幾千もの人々のくちびるによってくりかえされた。すべての者は、ここに預言された事件に、彼らの最も輝かしい期待と大事な希望とがかけられているのを感じた。この預言の期間は、1844 年の秋に終わることが示されていた。当時再臨信徒たちは、キリスト教界の他の人々と同様に、地上、あるいはその一部が、聖所であると思っていた。そして聖所の清めとは、最後の大きな日の火によって地が清められることであり、これはキリストの再臨の時に起こると、彼らは理解していた。そこで、1844 年にキリストが地上に帰られると結論したのであつた」（各時代の大争闘下巻 119, 120）。

新約聖書の聖所

「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った」(黙示録 11:19)。

「すると、たちまち、わたしは御霊に感じた。見よ、御座が天に設けられており、その御座にいますかたがあった。……御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが、発していた。また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。これらは、神の七つの霊である」(黙示録 4:2～5)。

「また、別の御使が出てきて、金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」(黙示録 8:3)。「天の聖所の聖所と至聖所は、地上の聖所の二つの部屋によって表わされている。使徒ヨハネは、幻のなかで、天にある神の宮を見ることを許されたとき、「七つのともし火が、御座の前で燃えてい」るのを見た(黙示録 4:5)。彼は、一人の天使が、「金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」のを見た(黙示録 8:3)。ここで、預言者は、天の聖所の第一の部屋を見ることを許された。そして、そこに、地上の聖所の金の燭台と香壇によって表わされていたところの、「七つのともし火」と「金の祭壇」を見た。再び、「天にある神の聖所が開けて」(黙示録 11:19)、彼は、奥の幕の中の、至聖所を見た。彼はここで、「契約の箱」を見た。それは、神の律法を入れるためにモーセが作った聖なる箱によって表わされていたものであった。

こうして、この問題を研究していた人々は、天に聖所があるという疑う余地のない証拠をつかんだ。モーセは、示された型に従って、地上の聖所を造った。パウロはその型となった天の聖所が、真の聖所であると教えている。そしてヨハネは、それを天に見たと証言している」(各時代の大争闘下巻 127)。

「そして、ダニエル書 8:14 の預言は、この時代に成就されるのであるから、ここで言う聖所は、新しい契約の聖所であるに違いない。2300 日

が1844年に終結したときに、この地上には幾世紀もの間、聖所はなかった。こうして、「二千三百の夕と朝までである。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という預言は、疑いもなく天の聖所をさすのである」（各時代の争闘下巻130）。

地上の聖所において

「主はモーセに言われた、「イスラエルの人々に命じて言いなさい、『あなたがたは香ばしいかおりとしてわたしにささげる火祭、すなわち、わたしの供え物、わたしの食物を定めの際にわたしにささげることを怠ってはならない』。また彼らに言いなさい、『あなたがたが主にささぐべき火祭はこれである。すなわち一歳の雄の全き小羊二頭を毎日ささげて常燔祭としなければならない。すなわち一頭の小羊を朝にささげ、一頭の小羊を夕にささげなければならない。……これはシナイ山で定められた常燔祭であって、主に香ばしいかおりとしてささげる火祭である』（民数記28:1～6）。

「その子牛を会見の幕屋の入口に連れてきて主の前に至り、その子牛の頭に手を置き、その子牛を主の前で、ほふらなければならない。油注がれた祭司は、その子牛の血を取って、それを会見の幕屋に携え入り、そして祭司は指をその血に浸して、聖所の垂幕の前で主の前にその血を七たび注がなければならない」（レビ記4:4～6）。

「日ごとの務めは、朝夕の燔祭、金の祭壇における香の供え物、及び個人個人の罪のための特別な供え物からなっていた。

「毎日、悔い改めた罪人が幕屋の入り口に供え物を持って来て、手を犠牲の頭において自分の罪を告白し、こうして自分の罪を象徴的に自分自身から罪のない犠牲へと移した。それから動物はほふられた。……罪人の失われた生命を表わす血、すなわち犠牲が彼の罪を負って流したものが、祭司によって聖所の中に運ばれ、幕の前に注がれた。幕の後ろには、罪人が犯したその律法を入れた箱があった。この儀式において、罪は、血によって、象徴的に聖所に移された」（各時代の争闘下巻131）。

「イスラエルの罪が聖所に移されたので聖所は汚れ、そのため、罪を取

り除く特別のつとめが必要となった。神は、祭壇と同様に二つの聖所の部屋についてもあがないをなし、「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならぬ」とお命じになった(レビ記 16:19) (人類のあけぼの上巻 419)。

「一年に一度、大いなる贖罪の日に、大祭司は聖所を清めるために至聖所に入った。そこで行なわれた務めによって、一年間の務めが完了した。贖罪の日に、二頭のやぎが幕屋の入り口に連れてこられ、くじが引かれた。「一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのため」(同 16:8)。主のためのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた。そして、大祭司は、その血を幕の中に携えていき、贖罪所の上と贖罪所の前に注がなければならなかった。血は、幕の前の香壇にも注がなければならなかった」(各時代の犬争闘下巻 132)。

天の聖所で

「しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって、わたしたちのために永遠のあがないを全うされたのである」(ヘブル 9:11, 12 英語訳)。「ところが、キリストは、ほんとうのものの模様にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」(ヘブル 9:24)。

「1800 年にわたって、聖所の第一の部屋において、この務めが続けられた。キリストの血は、悔い改めた信者のために嘆願し、彼らがゆるされ天父に受け入れられるようにしてきたが、しかし彼らの罪は、まだ記録の書に残っていた。型としての儀式において、一年の終わりに贖罪の働きがあったように、人類の贖いのためのキリストの働きが終わる前に、聖所から罪を取り除く贖罪の働きが行なわれるのである。これが、2300 日が終了した時に始まった務めであった。その時に、預言者ダニエルが預言したとおり、われわれの大祭司は、彼の厳粛な働きの最後の部分を行なうた

めに、すなわち聖所を清めるために、至聖所に入られたのであった」(各時代の大争闘下巻 136)。

「イエスがわれわれのために仕えておられる天の聖所は、大いなる原型であって、モーセが建てた聖所は、その写しであった」(各時代の大争闘下巻 126)。

罪の除去

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」(イザヤ 43:25)。

「だから、〔調査審判の間に〕自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて……イエスを、神がつかわして下さるためである」(各時代の大争闘下巻 382 : 1888 年版英語訳)。

「すべての人の行為は、神の前で調査され、忠実であったか不忠実であったかが記録されている。天の書物の中の各自の名の向かい側には、恐るべき正確さで、すべての悪い言葉、利己的な行為、義務の怠慢、隠れた罪、巧妙な偽善行為などが記入されている。天からの警告や譴責をなおざりにしたこと、時間を浪費し、機会を活用しなかったこと、善きにつけ悪しきにつけ、及ぼした感化とその広範囲にわたる結果などがみな、記録天使によって記録されている」(各時代の大争闘下巻 213)。

「多くの者が自らを欺いている。なぜなら、愛の原則が彼らの心のうちに宿っていないからである。彼らは自分自身の過ちや欠点に目を閉じるかもしれないが、神を欺くことはできない。改革がなくてはならない。真理の鋤の刃が、わたしたちの誇り高い心の中の畝間を深く耕さなければならない。そしてわたしたちの聖化されていない性質の芝草をむしり取らなければならない。それは、イエスの御霊と愛がわたしたちの心に植えつけられるためである。時は速やかに過ぎ去っている。そしてまもなくすべてのわがが裁かれる。そして、わたしたちの罪か、もしくはわたしたちの名のいずれかが命の書から除去されるのである」(神のむすこ娘たち 49)。

リストが夜、悪い群衆に捕らえられたとき、残りの弟子たちもまた、本当に恐れました。聖書は、「弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った」と言っています（マルコ 14:50）！

わたしたちはどうでしょうか？

恐れというのは本当に問題です。でも、おどろいたことに、神様のみ助けによって、聖書の偉大な英雄たちは一男も、女も、子供も—それに対して勝利を得たのです。わたしたちもまた、勝利することができます。イエスさまはわたしたちに、あらかじめ、わたしたちの生涯に何かこわいことが起こってもおどろいてはならないとおおせになりました。

たとえば、みなさんは、いじわるな人がこわいですか？イエス様はわたしたちにあらかじめクリスチャンにいじわるをする人々が起こるであろうと教えてくださいました。イエス様ご自身、残酷（ざんこく）にあつかわれしました。そしてわたしたちが、イエス様と同じように苦しむ時はいつでも、わたしたちをなぐさめるために、ご自分の御霊（みたま）を送ろうとしておられます（マタイ 10:25-28）。ただ詩篇記者（しへんぎしゃ）と同じ選択（せんたく）をしましょう。「わたしは神に信頼するゆえ、恐れることはありません。人はわたしに何をなし得ましょうか」（詩篇 56:11）。

暗いところがこわいですか？多くの子どもたちはこわがっています。しかし、神様はわたしたちに暗い間も、明るい時と同じようにわたしたちを守るためにそこにいと保証して下さっています（詩篇 139:11, 12）。

神様には、わたしたちが恐れるときに助けてくださるという約束がたくさんあります。このお方は「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」と言われます（イザヤ 41:10）。イザヤといっしょに次のように言おうではありませんか。「見よ、神はわが救である。わたしは信頼して恐れることはない」（イザヤ 12:2）。「というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎（つつし）みとの霊なのである」（テモテ第二 1:7）。ただ神様のたくさんの約束を、素晴らしい贈り物としてつかみましょ。そのとき、あなたもまた、もっとすぐれた勇気を築くことができます。

白菜の浅漬けサラダ

〔材料〕

白菜 1 個
長ネギ 1 本
粗糖 大さじ 2
レモン 大さじ 3
ごま油 大さじ 3
塩 大さじ 1/2
にんにく 2 片
パプリカ 適量 (生でも、パウダーでも)
ごま 適量

〔作り方〕

白菜を半分に切って 3 時間、塩水につけます。白菜にかぶるくらいの水に塩 200g 程度 (分量外) です。

白菜を取り出し、しんなりほどよく漬かっていたら、洗ってしぼります。

芯をとって、食べやすいサイズに切ります (大きめに、長く 8 つ切りくらいがおいしいです)。

長ネギは細切り、にんにくは包丁でつぶして粗いみじん切り、パプリカは生の場合、千切りにします。

それ以外の材料と一緒に、全部を入れて、手でよく混ぜて、できあがり!

(料理用ビニール手袋を用いると便利です)

〔コツ〕

漬け時間を短くしたい場合は、塩を増やして下さい。ただ、味が抜けないようにするには、あまり塩を入れすぎない方が良いです。

また、レモンとごま油は、食べる直前に入れます。(小分けにする場合、食べる分だけ取り分けた白菜に混ぜます。味加減はお好みで)

味の決め手は、おいしい白菜と漬け加減。

甘みのあるおいしい白菜が手に入ったら、ぜひお試しください!

野菜が多くとれて、食の進む一品です。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



よりすぐれた**勇気**を築く

恐（おそ）れ！わたしたちにはみんなあります。一番最初にこわくなった人は、アダムでした。彼がエデンの園で禁断（きんだん）の木の実を食べる罪をおかした後、彼は恐れて、かくれました。彼が恐れた最初の人でしたが、最後の人ではありませんでした。他にもっといます。

アブラハムは、エジプトの王が、自分の美しい妻（つま）サラをうばうために、自分を殺（ころ）すのではないかと恐れしました（創世記 12:10-20）。あまりにも恐れたために、彼はついに王をおこらせてしまいました。彼のむすこ、イサクも同じあやまちをおかしました（創世記 26:6-11）。

エリヤはどうでしょうか？悪い女王が彼を殺すとおどしたときに、彼はこの問題をどうすべきか神様にまずお聞きすることもしないで、パニックになって逃（に）げさりました（列王記上 19:1-4）。

ヨナを覚えていますか？彼は神様が自分にわりあててくださった仕事を本当にしたくありませんでした。彼は一神様が彼にその仕事を与えて下ったのであり、神様はいつでも最善（さいぜん）をご存知であるにもかかわらず一ネベの悪い人たちが決して悔い改めないのではないかと思って、彼らを恐れたのです。しかし、自分のむずかしい義務から逃げだすことによって、ヨナはけっきょくもっと恐ろしい経験をする事になりました。みなさんは、巨大（きょだい）な魚の中にとじこめられるなんて、想像（そうぞう）できますか（ヨナ 1:1-3, 17）。ただ神様のあわれみだけが、彼を助け出すことができました（ヨナ 2:1, 10）。



ペテロはどうでしょうか？彼は婦人が自分のことをイエス様に従うことを物笑（ものわら）いの種にしたとき、あまりにも恐れて、決まりが悪くなったので、自分の主をこぼんでしまいました（マタイ 26:69-75）。しかし、恐れたのは彼だけではありませんでした。キ